

ントナレバ乙ノ才ハ
日々之レヲ用キルノ
機會アル可シト雖
甲ノ才ハ決シテ之レ
ヲ用キルノ須要アラ
ザル可ケレバナリ難
題ヲ解釋スルガ如キ
ハ器械的ノ熟練ヲ得
ルニ過ギザレバ未ダ
必ラズシモ精神ノ練
習ニ必要ナル者ニ非
ラズ又數學ノ手藝ニ
於テ熟練ヲ得可キ最
良ノ方法ハ未ダ必ラ
ズシモ精神練修ノ成
蹟ヲ得セシム可キ最
良ノ方法ニ非ラザル
ナリ通常世ノ稱譽シ
テ以テ數學ノ才ニ俊
秀ナリト爲スノ人ハ
唯此レ奇怪ニシテ意
義ナキ數學上ノ難題
ヲ解釋シ我レハ人ノ
能ク爲ザル所ヲ能ク
スト云ヒテ誇ル者ニ

舉動 キョウド タチ井フル
巨大 キョウダイ ハナバタ大
巨擘 キョウヒツ オホエビ、
シラ
虚勞 キョロウ ヤマヒナド
シカレタ
距離 キョリ アイダリ
綺羅 キロ ツクシキモ
伎倆 キリョウ ウデマヘ
器量 キリョウ モノ、イ、
メカチニモ云フ
疑惑 ギウク ウタグリ
既往 キワウ スギサリタ
均等 キョウトウ ヒトヨクモ
ノ、ツリ
アヒヨキ

有栖川煇仁親王
嗚呼世功名ノ土ニ乏シカラズ而シテ其遭際榮顯節
濼ハラズ年愈老ヒテ朝廷ノ恩遇愈隆ナルモ蓋シ多
キコナシ常人ノ情才ヲ特ニ藝ニ誇リ己ガ分ヲ守ラズ
其嘗テ顯職ニ任シ物望アルモノト雖一朝廷ニシテ忿
ナ懷キ快々トシテ去ル或ハ大義ヲ犯シテ願ミザル者
アルニ至ル嗚呼此輩ヲシテ故議官松岡郷ノ事ヲ見セ
シメバ奚ゾ愧ザルナキコナシ得ンヤ蓋シ卿藩府ニ在レ
バ乃チ藩府ノ職ニ稱ヒ朝廷ニ在レバ乃チ朝廷ノ職ニ
稱フ小官ニ居テ鄙シトセズ大官ニ居テ驚カズ數々罷
ラレテ悶ヘズ數々擢デラレテ喜バズ中興ノ治ヲ贊ク
ルコト十年ノ久シキヲ歴教育ノ基礎ヲ立テ法制ノ紀綱
ヲ張り莖々トシテ倦マズ老テ愈々篤ク遂ニ以テ元老
院議官ノ位ニ終リ一節始終六十四年蓋シ一日ノ如シ
其ノ生ヤ榮エ其死ヤ哀シム君恩ノ隆ナルニ由ルト雖

過ギルナリ故ニ曰
ノ數學ノ目的タルヤ
人ノ精神ヲ練修シテ
之ヲ伸暢發達セシム
ルニ在リ決シテ之レ
ヲシテ唯ニ計算ノ器
械タラシムルニアラ
ザルナリ
簿記學
簿記學トハ則チ簡易
ノ方法ヲ以テ商業ノ
景況及ヒ盛衰ヲ示ス
者ニシテ商業上ノ取
引ヲ記載スル法式ヲ
云フナリ通例此ノ簿
記ノ法ハ第一、年月
日ノ順序ヲ以テ商業
取引ノ沿革ヲ記録ス
其帳簿ヲ名ケテ日記
簿ト云フ第二、商業
ノ成蹟ヲ類別ス此帳
簿ヲ名ケテ臺帳若シ
クハ原簿ト云フ其類
ノ法ハ原簿ノ左右勘
定書ノ部ニ買賣出納

ゆ之部
勇健 ユウケン ツヨクダツ
勇斷 ユウダン コトニダメ
裕福 ユフフク ユタカニト
雄辨 ユウベン イサマシキ
愉快 ユクアイ イチヨクコ
遺言 ユイゴン 人ノシニギ
遺誠 ユイセイ シニギハニ
遺物 ユイブツ イマシメ
由緒 ユイシュ ツタヘキタ
唯一 ユイイツ ツタヘキト
め之部

菅公祭ル文
抑モ亦臣節ノ嘉ス可キナリ嗚呼卿夫レ知ルコトアラ
バ亦以テ瞑スベキカナ
明治十六年孟春某日常陽ノ一書生岡野英逆旅ニ於テ
不腆ノ酒ヲ奉シ以テ贈太政大臣菅原道真公ノ靈ヲ祭
ル嗚呼公天授ノ才不世出ノ學ヲ以テ用井ラレ謀以テ
聽カレ翰林學士ヨリ出デ荐リニ台鼎ニ登千載ノ一遇
萬世ノ機會ト謂フベキナリ公周公ノ爲チ以テ自ラ任
ズ其志蓋シ天子ヲシテ堯舜タラシムルニアリ而シテ
其身ヲ顧ミルニ違アラザルナリ世人其三善清行ノ諫
ヲ用井ザルチ以テ爲メニ公ノ徳ヲ云々スル者アレモ
是レ道フニ足ラザルナリ夫レ公周公菅祭ル處スル事
ヲ以テコレヲ藤氏ニ施サント欲シテ而シテ成ラズ不
幸ニシテ而シテ奇禍ヲ踏ム者ナリ偶英事ヲ以テ京師

◎諸學科大意

◎ゆめ之部

◎菅公祭ル文

百七十一

等凡テ商業ニ關スル各種ノ條款ヲ列記シ以テ商業ノ景況ヲ窺ハント欲スル時ハ常ニ一日シテ明瞭ナラシムルニ在リ最モ原簿及ビ日記簿ノ二種ヲ以テスルハ最簡易ノ簿記法ニシテ其範圍ノ狹少ナル者ニ非ラザルヨリハ之レヲ用フ可カラズ然リ而シテ盛大ナル商業ニ於テハ種々附屬ノ帳簿ヲ要ス可シ而シテ其帳簿及種類ノ如キハ一ニ商業ノ性質ニ關ス又簿記法ノ最簡易ナル者ニ於テモ原簿下日記簿トノ間ニ仕譯帳ト名ツクル帳簿ヲ用キ以テ各種ノ取引ヲ細記シ以テ原簿ニ記入シ易カラシムルヲ常トス

明鑒 ヨクミヌキ
銘肝 キモニエリ
明細 コトコマヤ
鳴謝 ルコト
命數 ユキイノ
明達 モノゴトニ
明斷 アキラカナ
命中 メアテホシ
酩酊 ハナハダシ
名望 人ヨリノヨ
明敏 カシコクス
冥福 ツイセン

ニ至リ途次北野祠前ヲ過ギ公ノ昔日ヲ想ヒ戲歎去ル能ハズ因テ文ヲ薦メテ之ヲ祭ル尙クバ饗ケヨ
◎南禪寺ニ楠公ヲ祭ル文
依田學海
維明治十八年五月二十四日從六位依田百川敬ミテ祭
楠公ノ靈ニ致ス嗚呼公死シテ五百余年吾皇觀聖國
家中興シテ群賢彌ケ輔ク蓋シ公靈ノ憑ル所此ニ於テ
乎世乃テ謂フ公ノ績山川ト並ビ峙ヘ日月ト同シク升
ルト百川以爲ク是レ則チ然リ然レ公ノ志未ダ全タ
カラザルナリ何トナレバ陪臣命ヲ擅ニシ九世相傳フ
公一臂ヲ奮フテ巨厦忽チ顛ル獼猴窺竄怒髮天ヲ衝ク
嗚呼而シテ今何ノ日ゾヤ曰ク魯曰ク英曰ク米曰ク佛
弱肉強食智計百出公ヲシテ在ラシメバ駕御制壓寧ロ
其術ナキカ後ノ公德ヲ追念スルモノ徒ニ公ノ名ヲ慕
フテ而シテ公ノ實ニ遺スモノナシ東山ノ麓南禪寺ノ

簿記法ノ完全セル者ハ複記法ト名ツル則チ商業ノ取引ヲ原簿ニ細記スルコト少シモ二回ヲ要スルヲ以テ之レヲ複記ト稱ス其一ハ之レヲ借ノ部ニ記入シ一ハ之レヲ貸ノ部ニ記入スル等凡テ貸借ノ法ニ據リテ記入スルモノヲ云フ簿記法ニ用キル貸借ノ二語ハ貸主及借主ト云フノ義ナレモ又隨意ニ用キル所多シ其真ノ語義ヲ存スル者ハ唯他人ニ係ル勘定ニ應用スルトキニ在ルノミ其之レヲ簿記法ノ總體ニ通用スルモノハ計算區別上大ニ便宜ナルヲ以テナリ將亦複記法ノ精妙ニシテ且ツ要用ナル所以ハ數理ヲ以

冥目 メチフサグ
螟蛉 ヨリツノコ
盟約 チカビチダ
名譽 ノヨキヘハ
明瞭 ハツギリス
滅法 ハウグワイ
滅亡 ツアレル
瞑眩 メクルメク
面貌 カホツキ
面諭 メノマヘテ
綿密 マヤカ
微塵 マカキコト

◎藤田東湖ヲ祭ル文
安井衡
維レ安政乙卯冬十一月二日飢肥安井衡清酌庶羞ノ奠
ナ以テ遙ニ亡友水戸東湖藤田君ノ靈ヲ祭ル日ク嗚呼
哀哉君禍ニ罹リシヨリ今ニ三旬神蘇シ魂定マル我情
更ニ酸シ時ノ變事前聞ニ絶ス轟然一震地坼岸淪ム孤
寡城ニ滿ツ東西哀呻豈慘セズト謂ハン痛最モ君ニ在
リ嗚呼哀哉君ノ猶ホ壯ナル羽澤ニ見ハレ言論矯々咳
唾壁ヲ成ス入テ明主ヲ輔ケ出テ賓客ニ接ス弊革リ利
興リ百姓手額覲トシテ彼鬼蜮間ニ入り隙ニ投ズ主既
ニ位ヲ遜ル君亦迹ヲ削ラル一室閉聲譽愈赫々タリ
嗚呼哀哉君ト一別十有三年德厄ニ成ル才湧ク泉ノ如

◎前野和久
◎藤田東湖ヲ祭ル文◎藤田東湖ヲ祭ル文
百七十三

テ會計上ニ適用シ且
ツ常ニ各部ノ計算ノ
精否チ一目證明スル
ヲ得ルニアルナリ今
複記法ノ原理ヲ略述
センニ第一、凡ソ財
産ハ其何物タルヲ論
ゼズ之レヲ量ルニ貨
幣ヲ以テ準據ト爲ス
可シ第二、斯ク計算
セル財本ノ總額ヨリ
其商業上ノ借財ヲ減
却スレバ其殘額ハ則
チ現在財本ノ殘額タ
リ第三、財本ノ増減
ハ二種ノ原因ヨリ生
ズル物品ヲ賣ルニ其
元價以上ノ價ヲ以テ
シ或ハ現在所有ノ價
格ノ上下スル此レナ
リ第四、凡テ損益ハ
直ニ商社ノ所有ノ純
額ヲ來タス者ナリ故
ニ其時間ノ間ニ生ズ
ル商業上ノ利益ノ純

少聖言天定マリテ人ニ勝ツ讒白冤雪君臣喬遷其驥足
ヲ展ベ以テ洋羶ヲ禦グ海内喁々踵企領延嗚呼哀哉予
驚ナリト雖ニ臭味偶同幢々往來雀ノ鴻ニ伴フガ如シ
君唱ヘ予和ス予始々君終フ陰輔冥贊以テ衷ヲ獻ズ事
則チ多ク違フ而シテ志未ダ定マラズ奈何セン昊天此
憫凶ヲ降ス嗚呼哀哉夫ノ一震ニ當リ君既ニ免ル阿母
懇篤入テ災彈ヲ防グ君見テ而シテ入ル之ヲ腋シテ以
テ趁フ踈樊朽籬亦其舛ヲ致ス間只一髮大厦浪轉嗟君
已シヌ而シテ母喘ヲ延ブ至誠注グ所孝道乃チ顯ハル
嗚呼哀哉君嗣アリ亦其家ヲ克クス母慈妻貞蘭桂茁芽
君ヲ先兆ニ葬ル其藏孔ダ嘉ス夫衆感蔽遮スル所ナキ
ニ比スレバ人生榮死安什佰以テ加フ獨彼洋逆未ダ其邪
ヲ悛メズ國是定マラズ妖言日ニ譁シ式テ思ヒ式テ痛
ミ天ヲ仰ギ長嗟ス嗚呼哀哉尙クバ饗ケヨ

◎海城招魂祭々文

額ハ同時間中其所有
ノ純額ト符合ス可シ
以上記載セル數則ハ
別ニ註解ヲ加ヘズシ
テ明カナリ而シテ商
業上ノ事實ヲ詳録ス
ルニ當リテハ必ズ遵
守ス可キ者タリ此レ
則チ複記法ノ實行ス
ル所タリ

簿記法ノ理論ハ原簿
ニ在リ原簿ハ前ニ云
ヘル如ク勘定ノ帳簿
ナリ勘定トハ金銀ノ
出納、物品ノ賣買、手
形ノ仕出及償還、借
財ノ負擔及ビ消却等
ノ如キ同様ノ條款ヲ
以テ記入スルナリ云フ
其体裁皆同シ各一種
ノ題號ヲ設ケ貸借ノ
二部ヲ區別シ以テ相
方多寡相償ヒ而テ後
其一方ニ殘餘セル過
剩ヲ以テ此勘定ノ眞

維時明治二十八年一月十九日以清酌庶羞之奠祭
死西征之役一軍人軍屬之靈嗚呼軍人軍屬遠涉
洋遠踐山澤一當堅不撓遇強不卻或死彈丸
或斃疫癘一人豈無家親莫罔兒義勇奉公不顧
其私是以戰野虜必潰離夏則炎天冬則沍
寒忠節盡國不厭其艱是以攻城取之不難魂
魄在天地無影迹氏名在牒容姿何覩我武之
揚此靈惟藉嗚呼哀哉尙饗

◎祭徂徠物夫子靈文

陸軍中將 桂 太郎

天保庚子季春崎港高島氏見貽一篋中有物夫
子辨道辨名在即清人錢泳梓之於彼地者有小
傳有子小序皆錢之筆也社中二三子大喜相賀遂
卜四月朔薦之夫子之靈予以犬馬之長先炷

◎諸學科大意
◎し之部
◎海城招魂祭々文の祭徂徠物夫子靈文
百七十五

言ヲ示ス可シ故ニ原ノ内金銀勘定ノ左側則チ借ノ部ニハ收入ノ金額ヲ記入シ其右側則チ貸ノ部ニハ支出ノ金額ヲ記入ス可シ而シテ後双方相對照シテ差則殘額アルキハ則チ借ノ部ニ屬ス可キ者ニシテ我手元ノ金額ナリ又物品勘定ノ借ノ部ニハ買入物價ノ條款ヲ載セ其貸ノ部ニハ其物品ノ賣額ヲ記入シ雙方比較シテ差則チ殘額アルキハ或ハ純益トナリ或ハ損失トナル可シ凡ソ商業上ノ取引ニシテ損益ノ二元素アル者ハ必ラズ金錢及物品勘定ノ二種ニ於テ之レヲ觀ル可シ其一ハ則チ所有ノ多寡ヲ掌リ其一ハ

一瓣香一拜手稽首謹告曰
 二書者精神之所存今而至於此夫子有知之否其小傳稱日本國徂徠先生是豈徒然乎哉其小序曰以經證經折衷孔子是豈徒然乎哉錢亦彼中一老成門下之士必濟々繼而和之推而擴之庶幾遍于禹服之地夫子之學得之於彼之古沒後百有餘年又傳之於彼之今天乎神乎世遇乎尙饗

◎祭先師南洋先生文

維萬延紀元歲次庚申十一月朔越十有三日壬寅弟子橋本惟孝本惟孝恭以三清酌庶羞之奠祭先師故文學南洋中田先生之靈嗚呼哀哉山梁頽壤孝在東都冰淵莫聞亦不拳扶一計音條至涕淚沾裳無由廬墓唯行心喪今夏歸家未修祭奠心事多違愧懼交踣歲月不留迨小祥期官事倥偬奔赴又虧嗚呼哀哉先生

則チ其増減ヲ示ス今金錢ヲ以テ我借財ヲ償フガ如キ同價額ヲ以テ同價額ト交換スルガ如キハ之レヲ消却ト名ツケテ取引ト云ハズ其之レヲ記入スルニ當リテハ物品ノ賣買ト異ナルコト無シト雖モ更ラニ損益ヲ生ズルコトナキナリ以テナリ故ニ眞ニ商業ノ取引ト稱ス可キ者ハ其要ヲ此二種ノ計算ノ間ニ分掌ス則チ物品勘定ハ各箇ノ損益ヲ示シ金錢勘定ハ財本ノ純額ヲ示シ以テ原因及ビ成績ノ如何ヲ詳カニス可シ之レヲ畧言スレバ勘定ノ損益ノ純額ヲ示シ成績ノ勘定ハ財本増減ノ純額ヲ示ス可シ

教人朝夕不倦 祁寒暑雨莫一有變 先生他出弟
 子後室歸乃講書不違 終食門下絃誦日興歲
 隆執贄至者殆偏國中 孝甫十四受業於門視之
 猶子撫育之恩壯而脩業 阪府之市先生愛惜亦
 不敢止蓋好孝志庶其有成 命耳提手書悃誠
 孝之承乏而喜可知 猶恨鳴門遙隔絳帷覆翼之恩
 涓埃未報一訣終天 大慟長號先生爲人恭儉溫良
 居家面而臨宦而方事 母至孝官褒以金事兄
 而悌獲其歡心撫妹之家 以及諸姪一經紀有法無
 有虧缺擢爲教官司成善 誘人士矜式泰山北斗
 志老益壯謹勤不罷身或 抱痾猶趨舍嘗講君
 側眼花鼻液諄々啓沃以 冀有獲景公之薨義當拜
 墓時偶有疾人恐艱步 先生奮然遠航海水遂
 遇霧露終以不起先生 說經該博不拘其於古
 文最得膏腴道德南華 春秋左氏各有成說貽我學

◎論學科大意

◎し之

◎祭先師南洋先生文

簿記ノ方法其様式甚
 多ク且ツ其精粗ヲ
 判定スル人々互ニ其
 意見ヲ異ニスルヲ以
 テ今一々其特殊ノ殊
 裁ヲ記載揚述スルコ
 ト難シ然レモ之レヲ
 概言セバ簿記法ノ範
 圍ハ唯其帳簿ノ主ト
 シテ常ニ已レガ財本
 ノ多寡種類ヲ知ラシ
 ムルニアルノミ今若
 シ商人ニシテ常ニ已
 レガ財本ノ多寡ヲ知
 ルヲ得バ其時間ノ間
 ニ其増減ノ如何ヲ算
 定スルノ容易ナルコ
 ト固ヨリ論ヲ俟タザ
 ルナリ
 或ハ説ヲ爲スモノア
 リ曰ク簿記法ハ販房
 ニアリテ實地ノ商業
 ニ從事スルニ非ラザ
 レバ其要ヲ得可カラ
 ズト然レモ此説甚ダ

刺激 ツキオホコス
 刺撃 サシツツコ
 私語 サイヤク、
 ヒソヒソバ
 耳語 ミミウチ、
 ミミコソリ
 爾後 ソノノチ、
 ソノノチ
 至公 スコシモエ
 コヒイキナ
 ナル
 自業自得 ガノ
 シタコトニテオノレ
 ガソノムケヒチウケ
 仔細 コマカキコ
 トガ
 自裁 自殺トオナ
 ハラキ
 自殺 ミヅカラミ
 チコロシテ
 死スルコト

士ニ若夫書札以 及文詩一舉世爭賞視 同珍奇孝
 侍左右殆六千日徒 知讀書行不能一 朝見
 背如瞽失相事有 疑惑從誰咨訪 昊天無極喪
 我良師一追慕深眷 斯一吾悲一嗚呼 悲哉尙 饗ケヨ

◎祭南郭服部先生文
 藤澤 東 咳
 安政五年戊午季夏念一係南郭服部先生一百年忌日
 乃與社中二三子相謀以先生遺稿一招其靈一謹陳
 清酌庶羞祭之曰
 維昔護國之興也先生輔相之功碩甫也欽擢老風豈
 不被先生之澤先生全稿四十卷前後分之二爲四編
 或云古唐之調鏘々爾或云秦漢之辭燦々然世人以
 擣藻稱之先生以護藻靡一世先生匪直文藝
 人蓋藏才德于文藝稿中贈某侯一序施濟之事具
 陳莽々二千許言是可以窺其真天壽所保古稀加

穩當ナラザルニ似タ
 リ何トナレバ實驗ノ
 理論ニ如カザルハ獨
 リ簿記法ノミナラズ
 諸術皆然リト雖モ今
 之レヲ教フルハ將
 來ノ豫習トナレバナ
 リ前條ノ譏議ヲ避ケ
 ンガ爲メニ實地商業
 ノ取引ニ類似セル演
 習ノ科ヲ設クル學校
 甚ダ多シ故ニ國內各
 所ノ學校ニ於テハ其
 生徒彼我相通信シ彼
 我ノ間ニ於テ商業上
 ノ物品ヲ相送遺シ爲
 換手形ヲ賣買シ以テ
 各所ニ行ハル、商業
 ノ特例ヲ習知セシム
 而シテ尙ホ完全ノ練
 習ヲ得セシメンガ爲
 メ屢各自生徒ノ日々
 ノ職掌ヲ更換セシメ
 今日ハ書記トナリ明
 日ハ主簿ト爲リ其次

自在 ガモヒノマ
 コトロニガ
 モヒウカヘ
 思想 ミトツケ
 視察 ミトツケ
 四散 ラバラバ
 嗣子 フトツキ
 致々 ムサマニ云
 時々 トキドキ又
 事實 コトワケ、
 コトガ
 始審 ハツメノサ
 私情 ツブシム
 カウヨキヤ
 ウニチガフコト
 辭讓 エリクダリ
 エグルコト
 自若 コトニアヒ
 テスコシモ
 カドロカズサガマ

七夙 脫官羈優游安逸以施敦厚之教以濟輕浮
 之迷俯之潤川嶽仰之耀壁奎一子孫孫嗣又嗣
 今也立孫伯仲叔確乎守其家規不爲俗氣所黷
 同其居共其產戮力以理絳帷師無常弟子弟
 子無常師距今十有數年令聞達于大府大府賜
 以白金寵榮顯于寰宇先生有孚之德後昆承斯展
 舒神洋洋在其上嗚呼果知之歟護老鈴錄抉孫吳
 秘頃日郡藩梓行之以充國家緩急備一叔竭力而
 校之其校誠精且詳梓成奉幕府永爲官庫藏先
 生有用之材裔孫傳斯興起靈優々見其位嗚呼必
 知之矣我先師曰城山城山師曰東園師曰菅甘谷
 實與先生同門甫也雖不敏一歷々有受授不可
 謂非類竊自比裔會一尙饗ケヨ

◎祭伊藤東涯先生文
 武田 梅 龍

◎醫學科大意
 之世
 ◎祭南郭服部先生文◎祭伊藤東涯先生文
 百七十九

日ハ截貨主ト爲リ以テ能ク生徒ヲシテ各種ノ演習ニ熟達セシムルナリ此ノ如ク教授ノ法宜シキニ適セバ實地商業ニ從事スルモ決シテ踳躓ナク圓滑ニ其實効ヲ奏スベキハ疑ヒテ容レザルナリ

●政治學
斯ノ學ハ概言スレバ其國ノ憲法、政府ノ主眼ナル官吏ノ權限職分、人民ノ負フ所ノ法律上ノ制限及ビ市町村制ノ概略等ヲ考究スルニ在リ近來此目的ニ供ズル爲メニ好良ナル教科書ヲ編纂スル者アリ知識アリ且ツ有用ナル人物ヲ養成スルノ學校殊ニ公立學校ニ於テハ此ノ學科ノ價值アリ

至誠
時勢
咫尺
死戰
至當
七情
輻重
執拗
失意

元文初元歲次丙辰七月十六日平安之處士東涯伊藤先生易簣此歲九月二十六日門人美濃篠亮謹作祭文一篇以告先生之靈曰

嗚呼名世之賢克幹文事一砥業世美家聲以熾孝友爲政君陳是欽其孝誰似閱損曾參其友何比損篋瑟琴宜于家人浴德洗心温々其恭維道之基自非求譽德感四垂自西自東聞風而馳來服濟々教誨孳々鄙者寬焉薄者敦焉開赤心白日麗天其心白日而躬黃泉嗚呼文章之弊追琢徒苦唯我先生載道師古吹六經一憲章鄒魯博覽多識惠此東國海納百川停淵不可測邈不能窺吻筆成章言泉如流字不苟且句必綢繆采珠滄海一拾玉昆丘一雄如虹霓英如蘭蕙著書之富有誰能逮筆硯未倦身已永逝嗚呼哀哉嗚呼耳順既過未及古稀雖曰不夭與德何遠七月之望

ルコト疑テ容レザル所ナリ

○經濟學
抑モ世人ガ經濟學ヲ賤別シテ教育上固有ノ地位ニ置クヲ許ササル原因ノ一ハ各人日々其業務ニ從事スル瞬間毎ニ必ラス此學ノ論ズル旨趣ニ遭遇シ教授ヲ待タズシテ此旨趣ニ就キ自ラ一定ノ說ヲ懷クヲ以テ其學問ヲ賤蔑スルニ因ル然リト雖凡誤謬ノ方法ハ其數際限ナクシテ眞理ハ唯一ノミ故ニ其誤謬ニ陷ラザラントスルノ道ハ其發途ヨリシテ正路ヲ踐ミ依法的則ヲ理學的ニ攻究ヲ爲シ已ニ知ラレタル者ヨリ未ダ知ラレザル者ニ進ムニ在ルノミ今

悉皆
執行
膝行
實效
實況
實義
實素
失蹤
失體
失當
執達

函丈樞衣誨我諄諄談笑未衰未會數日計告忽來梁木之難豈唯我獨凡今之人百身欲贖不朽者業令子其續不味者神無所不燭仰示永慕知我心曲嗚呼哀哉尙饗

◎弔大石良雄文

出郭而南二十里望芝山於海畿佳城鬱々茂林菲非金僊收宮棟宇翬飛攀蘿蘿而上躋瞻丘墳之巍巍曰赤穗之君臣爰啓瑩于翠微想候之沒會幾二年于今屹而餘威大石子暨其徒諸墓纍々而環圍伊昔一軀而同仇死猶喜魂魄相依慨念當日猶在目憶吾去此其安歸初吾慕古人嘆近世之莫親今觀子之所爲反疑初心之殆迂方諸子之流離不過爲亡隸遷虜一骨骨仕蕞爾之國死遂葬邊海之土而天下仰望如泰山賓旅奔赴如京都

人間實地生活ノ間ニ

認識スル所ノ説ハ依
法的ノ學問ニ據ラザ
ルヲ以テ概シテ誤謬
ニ屬スルヲ免レ難シ
而シテ此ノ誤謬ヲ免
レンニハ獨リ理學的
ニ考究スルノ一途ア
ルノミ又世人ハ經濟
學上ノ真理ニ就キテ
學者中ニモ異説アリ
其旨趣ノ困難ナル到
底兒童ノ了解シ得可
キ者ニ非ラズト思惟
スルニ至ル然レモ經
濟學ノ原理ニ至リテ
ハ此學ヲ攻究セシ學
者中ニ異説ナキコト
猶ホ幾何學ノ原理ニ
於テ數學者中ニ異説
ナキガ如シ之レ疑テ
容レザル所ナリ
教育者ノ衆論ニ據レ
バ少年タル者ハ形而
上ノ學ニ進ムノ前

失墜 ムヤクノイ

嫉妬 子タミ、ソ

失敗 シツコナヒ

失望 アテノハツ

質撲 コイロリチ

脂肪 動物ノアア

自暴自棄 ミツカラ

師範 シシヨウ

侍婢 コシモト

自負 ミツカラ

執心 カタクオモ

集令 ヨリアツマ

習慣 シキタリ

支辨 シハラヒ

親愛 シタシミ

新案 アラタナル

曠志 イカリ、ハ

宸翰 天子ノゴツ

心機 コイロノハ

審議 ウキヨクヘ

賑給 ホドコス

呻吟 シメク、ウ

進擊 スミカド

參差 モノノタケ

ツ之レ形而下ノ學
ニ向ケシム可シ因果
ノ理ヲ推究スルノ前
先ツ之レヲ觀察ノ方
ニ向ケシム可シト云
フ此規則ハ概シテ言
ヘバ正確ナリト雖モ
然レ此レ亦幼稚ノ兒
童ニ在リテハ必ズ推
理ノ運用ヲ爲サシム
可カラズトノ意ニ解
ス可ラズ唯少年ニア
リテハ推理ノ能力尙
ホ未ダ旺盛ナラザル
ヲ以テ先ヅ觀察法ニ
因リテ知識ヲ得セシ
メ既ニ知識ヲ得タル
後論理學的ニ其實
ヲ推究スルノ慣習ヲ
得セシム可シトノ意
ニ過ギズ今此ノ目的
ノ爲メ經濟學ヲ攻修
スルトキハ其利益甚
ダ多シ而シテ其授ク
ル所ノ知識ノ爲メノ

◎論學科大意

◎し之部

◎祭高山處士文

聚 無尺土之封而衆宗之猶臣之尊主無葭萃
之親而民愛之猶子之戀父嗟夫孛感之極有如
此耶吾謂事固有所輕重於世者未必不係
于命數自夫文教失宜天下相尚以武所賴勇
士排難忠臣禦侮奈何近世汰侈成俗淫酗爲
風十愆家々相祖嗟風俗之日頽有如將傾之宇
天作赤穗之難借諸子而支柱揭六合之綱維正
世之繩矩天地爲之震動人鬼爲之鼓舞吾未聞
丈夫立志砥節有若斯之赫赫者至於沈晦待
時堅忍成謀同愚筭子一協籌留侯蓋載在天下之
耳目無爲多言而徒咻惟私心之感慕有吾淚之不
留跪陳辭而相弔庶有識於幽

◎祭高山處士文

藤田一正謹以清酌庶羞之奠告于上野高山處士之
靈曰嗚呼吾與子別一日三秋豈圖不幸自遭大憂
孤盧泣血再期未周側聞處士暴死西州如夢如
覺驚嘆不休每一思之令人病悸喪既除服閱
月凡四乃如取酒祭哭爲位嗚呼子奚以暴死耶豈
誠有不能得而已耶將復已而不已耶獨不聞
之夫先哲守身之義一耶假令不啓矣易簣以全
歸一何爲乎割腸屠腹以就死西海與東海一風馬
莫及傳聞之紛々曷免異議一人非堯舜誰能盡善
嗚呼子乎吾悲其處變惟子供養王母兮侍湯藥
而不倦服喪廬家二年兮實近世之所鮮兄弟之
異撰兮奈人心之如面既無棟蓐之聯芳兮
嘆鶴鶴之在原其於祖妣之孝敬斯至豈獨同胞友愛
莫存噫彼小人好成人之惡兮爰罹鄉議之愈喧
遊四方欲償志柔弧兮宅一區寧終身田園嗚

藤田一正

維寬正六年歲次甲寅三月戊子朔越十一月戊戌水戶

ミナラズ其精神練修
ノ爲メニ其益甚大
ナリ然レ此學ヲ幼
稚ノ兒童ニ授クルニ
ハ常ニ耳目ニ顯ハル
者ヲ以テ之レニ陪
伴セシメンコトヲ要
ス例セハ年齢幼雄ナ
ル兒童ニ菓子ニ係リ
テ教訓ヲ授クル者ト
假定セヨ先ツ兒童ヲ
シテ其五宜ニ因テ直
チニ認識ス可キ諸性
質ヲ觀察セシムルノ
後チ教師タル者菓子
ニ係ル事實ノ中、物
理學、化學、生理學ノ
成績ニ因リテ知り得
タル者ヲ兒童ニ授ケ
此ノ事實ヲ語ルノ際
學者ノ用非ル術語ヲ
生徒ニ知ラシメンコ
トヲ務ム可シ從來最
良ノ教授者ハ庶物指
教ト名クル課程ニ於

駿々 サマニ云フ
深々 ヨノフケニ
森々 木ノシケリ
斟酌 ロトノコト
伸縮 ノビチヤミ
心術 コノロダテ
心醉 コトニフダ
親炙 シタシケツ
荏苒 トシツキノ
親疎 シタシキト
深窓 オクフカキ
ニニフ

呼子有類乎一匡章自痛吾賢之非孟軻禮貌交接
欲雪他日之冤獨行異調固非時俗之所能知况
乃生死之殊路千秋邈乎隔山河昔予從師官
學於江都始得與子傾蓋而晤言久想像個儻之
高節忽激昂奇偉之盛論吾何以辱大兒忘年之
交獨愧稱衡之偃蹇疾則餽藥歸則送行子之
東又顧余門上堂拜親已數歲音容在目弗可
護嗚呼懷高尚之質兮有慕乎魯仲連之爲人排難
解紛雖非戰國之策士輕世肆志庶爲太平
之逸民能知尊王而賤霸豈當當年之不帝秦
橐中之裝無一錢而彈劄綏以問津書纔足以
記姓名而有餘乎防身非有爵位於國不仕
而乃心朝廷聞赤狄之蠶食北陲而窺神州兮
恐其後世爲害天下蒼生上下宴安方耽鴆毒兮子
獨慷慨不受命以私行陽爲浪客而漂遊山水兮

テ久シク此ノ種ノ教
授ヲ施シタリ今ヤ菓
子ニ係ル事實中、庶
物指教ニ因リテ授ク
ル者ノ外ニ經濟學ノ
成績ニ因リテ知り得
タル者ヲ生徒ニ授クル
トキハ則チ其菓子ニ
係ル課業ハ完結スル
モノトス然レ物理
學、又ハ生理學ニ關
スル菓子ノ事實ヲ授
クルヨリハ經濟學ニ
關スル菓子ノ事實ヲ
授クルコト遙カニ容
易ナルヲ見ル可シ何
トナレバ經濟學ニ關
スル多クハ兒童ノ會
テ親シク注目セシ所
ナレバナリ兒童一タ
ビ其家内其製造場及
ビ其店舖ニ於テ顯ハ
ル、所ノ事實ニシテ
理學的ノ價值ヲ有シ
又其身邊ヲ圍ム所ノ

神速 スグレテハ
迅速 キハメテハ
眞卒 ツハミカザ
深沈 ヘル、又オ
晨朝 アサ六ツノ
震動 フルヒウゴ
眞如 マコト
親睦 シタシム、
訊問 トヒタス
迅雷 ハゲンキカ
眞理 マコトノス
振旅 イクサニカ
チヒキアゲカヘル

陰欲爲國家偵察虜情一期使衣冠禮樂之文物
不變於被髮左衽之羶腥豈云封侯万里之外取一身
富貴之樂杞人憂天地而葵不恤緯不知者認以
狂名一別之後杳無消息或傳其由北海入帝京
豈關防嚴禁不能得其要領耶抑黠賊潛謀未有三狡
計之見其形志士憂世瞻言百里有識慮之深長儉
情自喜取快一時乃愚人之常爾後三年果之北
使之事叩關款塞而請互市權場一既已甘言帛幣以
誘我加之虛聲恫喝以誇其富彊彼將還玩我國
於股掌之上以得其志何我國勢陵遲而威武不張
不伏中行說而答其背兮遂使醜虜輕視我東方
廊廟豈乏獻策請纓而士徒使草莽之人投筆而
心傷當此時子其在倚劒而望子於長天之
涯他日國家或得子而用之視死如歸赴水火
而不辭當使懦夫立敵愾之志不使古人專

◎諸學科大意
◎し之部
◎祭山山處士文
百八十五

事實ニシテ學校課程ノ用テ爲シ且其課程中ニ地位ヲ占領スルヲ見ル時ハ其視察力俄カニ發起シテ却リテ兒童ヨリ新規ノ事實及ビ事情ヲ教師ニ報告スルニ至ル可シ此方法ニ因リ兒童ハ其初等ノ階級ヲ經過セザル以前ニ既ニ富ノ生産ノ基律ヲ知ルノミナラス尙ホ且ツ道德ノ教、分業ノ結果及ビ物品交換ニ關スル種々ノ事情ヲ熟知ス可シ年齡十一二才ノ生徒ニ特科トシテ經濟學ヲ授ケンニハ務メテ庶物指數ニ類似シタル方法ニ因リテ授ケ兒童ヲシテ本國ニ居住シテ已レ及ビ一般ノ人民幾何ノ幸福ヲ享クルカニ

震慄 フルヒワナ
侵略 オカシカス
諮問 トヒハカル
滋養 カラダノヤ
掌握 シタルト
情交 シキマツハ
情誼 シヨリアイ
賞翫 モテハヤス
償還 ヘスコト
追獲 タケリクル
情狀 コトノアリ
情人 タガヒニコ
ヒガモフヒ

蹈海之奇 嗚呼晝夜之道死生亦大矣太山鴻毛輕重各有其時 羞惡之義根於天性 兮行道饑人亦獨不脣來食之嗟 唯豪傑之士能有忍而成 大謀兮出勝取履之辱皆爲之而不疑 惟子羈旅 備嘗險阻艱難兮千辛万苦其語誰 鹿島之行筑州之寓豈有屈節以拂亂心 思惜夫不能以身殉 君父之急 空伏劍鈍以與鮑焦之徒 同歸 臨終 從容謝天下之人兮萬里聞之 令我心悲 英魂招而不返 兮仰彼白雲而神馳 耿耿寤寐之間 兮獨見其雄偉之氣 與魁岸之姿 吾既不欲 作兒女子態 而予子方臨風悵然獨不覺 涕淚之相隨 感念疇昔寄哀 一奠之詞 惟子有知 髮髯來舉 此卮尙享

◎祭蒲生君平一文

嗚呼君平材足以 曠一世而其身之不能處學可

注目セシメンコトヲ要ス又此レ迄經濟學ニ關スル教授ヲ受ケザリシ兒童ニ就テハ其日々消糜スル或ル簡單ナル物品例セバ菓子ヲ將チ來リ其始メテ粗糲ナル材料ヲ産スルノ準備ヨリ消糜ニ適當セル形狀ト爲シテ之レヲ分配スルニ至ル迄其間ノ經歷ヲ詮釋セシム可シ此ノ如ク詮釋セバ今日生活ノ需用便利ニ供スル物品ハ殆ンド皆勞力ノ産スル所タルコトヲ生徒ノ心中ニ明瞭ニ理解セシムルヲ得此ニ於テカ始メテ生徒ニ富ト云ヘル名稱ヲ授與シ爾後此勞力ノ産ニ附與スルニ富ノ語ヲ以テス可シ之レニ次ギテ勸

祥瑞 メアタキシ
上疏 マウシタテ
狀態 ナリフ
賞牌 テガラチホ
讓與 ホカヘユヅ
商量 ハカラフコ
商量 ト、ソウダ
獎勵 ストメハゲ
常例 ナラハシ
邪曲 ヨコシマナ
雀躍 テヨドリシ
酌量 クミワケル
邪險 ムゴダラシ
カフ

以究萬古而會無補於斯世 窮愁無聊齋志以逝 豈乏鐵基時之不至 雖有知慧無可乘之勢 抑識者所憂 庸人所驚 言脫於口而身罹禍戾 不有熟眉之變 誰能留意 於盛衰之際 肉食鄙夫自古不達於大計 北虜之患 百年而服 蘇老之先見 西漢之治 一世以狂 賈世之流涕 嗚呼君平予生於數十 年之後 慕遺風以自勵 讀其書 想其人 殆夢結 而神契 竊傷當世之多故 一切慨斯道之陵替 欲起九 原而吊 英魂 幽明路隔 仙關深閉 孤墳三尺 唯見禽 噪 頽日而蟲吟 苔砌 嗚呼君平天下之事 漸至今日 上下俛々 莫志存匡濟 氣運之移 寧可付之太息 至 難之病 必有可投之劑 使大臣實講 方今之務 數篇遺書 孰謂不足 以矯時弊 身不遇於當時 而 求知已於千歲 自古英傑亦皆然 則何必傷君之 寂々而尤世之泄々 耶 感念往昔 聊致 庭祭 酒乃

◎新學科大意

◎し之節

◎祭蒲生君平一文

百八十七

百八十六

業、節儉、智識、熟練ノ四者ハ一人及ビ衆庶一般ノ幸福ニ必要ナルヲ以テ之レヲ授與ス可シ又分業ノ一項ヲ詮釋シ分業ハ勞力ノ生産力ヲ増加スルノ成蹟アルコトヲ解説ス可シ之レニ次ギテ甲ノ職業ニハ乙ノ職業ヨリ多クノ名譽ヲ附著スルコトノ流行セル弊習ノ理由ナキヲ生徒ニ示シ且ツ家内ノ事業ヲ爲ス者ト雖モ他ノ事業ヲ爲ス者ノ如ク生産ノ業務ニ従事スル者タルコトヲ理解セシム可シ此レニ至レバ生徒ハ物品交換ノ現象中稍々簡易ナル者ヲ理解スベキノ準備アルヲ以テ何人ナリトモ正直、信實ヲ守

奢侈 オゴル
謝說 コトハル
邪智 ヲルザエ
障礙 ヤマ
洒落 チヒラケタ
趣味 カンガヘ、
衆寡 ホキトス
衆諸 モロビト、
戎服 モノ
充滿 イツバイ
縦覽 オモヒノマ
需要 イリナウア

黃蕉丹荔神其有レ知 尙 饗
◎祭ニ故京都府知事申井君一文
明治廿七年十二月九日京都府知事正四位勳三等渡邊千秋等謹以三清酌庶羞之典祭故京都府知事正三位勳二等中井弘君之靈嗚呼君生長于流離間關之裡一抱負磊落奇偉之才夙嘆三政綱之頽隳忠義之氣奮如迅雷時適際海外列國共請互市一商船戰艦荐來君以二開國說唱天下魁傑躡躑爲幕臣所忌猜一幸遭聖明御宇一世運忽開乘風雲會一纒脫青災一名聲籍甚上達宸台一曰天齋壽福一空棄三亭臺永爲不歸之客嗚呼哀哉余雖與君不同國一奉職于鹿兒島縣一菲才承乏十有五年以故交情之密如兄一弟然賞花嵐峽一吟二月墨川一詩酒徵逐買醉醉十千於君履行子細悉旆戊辰元年五月君徵爲外國事務官一接各國

ルノ第一緊要事タルコトヲ發揮シテ明白ニ理會ス可シ而シテ此事項ニ就テハ宜シク成ル可ク多クノ例證ヲ引ク可ク生徒ノ詮釋ヲ復閱スルニ時々費スコト愈々多クレバ愈々良シトス因テ不信實ノ種々ノ種類及ビ結果ヲ頗ル明瞭ニ説明シ生徒タル者不正ヲ行ヒ成功セザリシ者ヲ厭惡スルノミナラズ尙ホ且ツ不正ヲ行ヒテ成功セシ者ヲモ厭惡スルニ至リテ止ム可シ之レニ次ギテ雇主及ビ雇人ノ關係ヲ整齊スル自然ノ法則ヲ授ク可シ此ニ於テカ職工組合ノ規則及ビ同盟罷工ノ成蹟等ヲ詳密ニ穿鑿シ又賃銀ノ旨趣

守舊 シキタリ
淑女 トクアリ
宿醒 フツカエ
宿怨 カチガ子
殊死 シニモノ
首唱 ハジメニ
侏儒 ヒダスコト
首鼠 ドチラツカ
述懷 オモヒナ
術計 テダテハ
出藍 ヒトヨリス
リノオシヘタルヒト

使節ニ機變處難英使之朝一也路傍踰覽忽有兇漢勢如驚瀾直迫公使一使心膽一寒君勇進健闘快手奮搏或縛或斃秋水染丹一遂使公使一脫虎口以得國家安矣英帝賜刀以深賞歎後歷任于東京神奈川等判事專說王朝復古之政兇頑人等皆知趨義凡百軍需終如初志而後掛冠歸鄉憂愁幽思空送三星霜一再徵自一兵部轉工部一省務頗有弛張又知于滋賀縣一事道路改良殖產興業獎勵有方事就一條緒一民皆稱揚已而致仕移宅西京一新築鴨水之畔扁曰山色水聲有親幸躋壽考其甘旨以盡歡情吟咏時遣逸興一音調亦自鏘々其集已傳于世足使一人驚有客滿坐風品月評悠悠不悶欲送餘生天之爲才不偶爾何容優遊處閑靜一擢知于京都一時有奠都祭祀經營且有三勸業大會設備規模宏壯盡力規畫其功垂

ナ精細ニ解説シ生徒
ヲシテ己レノ勞力ヲ
賣リテ得ル所ノ賃銀
ハ專ラ其勞力ノ生産
方ノ多少ニ關スルコ
ト及ビ職工組合ノ規
則等ハ勞力ノ生産力
ヲ減ズルノ性質アル
ヲ以テ亦勞力ノ賃銀
ヲ低下スルノ傾向ア
ルコトヲ明白ニ理解
セシム可シ之レニ次
ギテ財本ノ管理ヲ定
ムル所ノ法則ヲ教ヘ
又利分ノ思想ヲ發達
セシメ其性質ヲ詳密
ニ解釋ス可シ又財主
中ニテ相團結スルノ
自己ニモ害アリ社會
ニモ害アルコトヲ攻
究シ財主ノ利分ハ其
社會ニ對シテ施シタ
ル勤勞ニ對シテ社會
ヨリ酬ユル所ノ報酬
ニシテ其利分ノ多少

首伏 ツミチハク
ツヨウスル
首謀 コトチモク
ロムホツト
ウ人
瞬間 マダメクヒ
マ、メハシ
峻功 テキアガ
ル
俊傑 チエハタ
ラ
キノ人ニス
グレタル
潤色 イロチソ
ヘ
リツケル、
テイレ
純粹 マシリモ
ノ
ナキ、ヒ
馴致 ガンガン
ニ
ナレタル
殉難 國家ノタ
メ
ニアタリ
ガウギニ
スル

成。溢焉。而逝。空歸墳塋。嗚呼。后天有命。其死其生。恰如。一朝露。涕淚欲傾。君之官。于京也。余有二吏。部之省。臨別。懇々。誓言相警。暮雲春樹。旦夕引領。無幾。余又。辭官。永欲。以占。虛靜。何圖。受君。遺志。之士。當。祭。祭。君。靈。贊。舉。來者。如。雲。滿。庭。自古。死者。非。一。身。後。有。警。靈。其。知。否。君。以。可。嗚。嗚。呼。哀。哉。魂。髮。髯。而。來。享。

祭石川丈山文

進。而。厲。義。勇。於。三。軍。退。而。激。高。風。於。百。代。其。生。而。軒。昂。嶢。嶢。百。鍊。不。碎。其。死。豈。霧。散。電。滅。澌。盡。而。水。逝。乎。意。其。高。潔。昭。々。者。不。騎。星。辰。入。天。門。並。日。月。而。永。存。則。將。其。英。毅。剛。果。之。氣。聳。爲。山。岳。含。爲。洞。壑。發。爲。雷。霆。風。雨。攝。攝。百。鬼。役。彪。虎。以。威。服。于。

柴野邦彦

ハ其勤勞ノ多少ニ隨
フ者タルコトヲ明記
セシム可シ之レニ次
ギテ土地ノ所有權ヲ
教ヘ其所有權ノ採用
セラル、所以ノ理由
ヲ攻究シ且ツ地則チ
解釋ス可シ之レニ次
ギテ可賣價值ノ思想
及ビ價值ノ名稱ヲ教
ヘ價值ヲ整齊スル所
ノ定則ヲ詮鑿シ凡ベ
テ思想ヲ構ヘ言語ヲ
使用スルニ精密詳細
ヲ旨トス可キコトヲ
生徒ノ心中ニ銘セシ
メ務メテ例證ヲ舉ゲ
テ之レヲ解説ス可シ
此レニ至レバ容易チ
便利ニスルガ爲メニ
採用セラレタル方便
ノ二三ヲ詮鑿スルノ
時ニ達ス殊ニ貨幣ハ
容易ノ首位ヲ占ムル
コトヲ知ラシメ貨幣

主義 ロンノモ
ト
ダテ、ロ
ン
入興 アソビノ
オ
ヒオヒチ
モ
熟議 ヨクサワ
ダ
ンズルコ
ト
夙志 ハヤクヨ
リ
タテタル
コ
熟視 ヨクミツ
ム
宿儒 年コウチ
ツ
ミタルガ
ク
宿醉 フツカエ
ヒ
熟醉 十分ニエ
ヒ
熟睡 ヨク子入
リ
縮小 チビマル
ル
宿望 ヒサシク
ゴ
ノミナ

此土乎。不然。其文糸煥散。網韋醜郁。爲霜露。爲煙霞。爲風水之聲。爲草木之英華。徘徊眷戀乎此土。而不去。以娛遊者。日與之。盤桓娑娑乎。雖其英靈變化不可得而知也。然其可知者。方寸千載。日暮相照。雖以彥等之庸陋。抑亦吟風嘯月。不可謂不涉其流者也。恐有所不外矣。殺香酒烈。神其髣髴。乎其來饗。

吊今川義元文

嗚海驛。東里餘岡。阜陂陀。此間號曰桶峽。有碑立於榛莽之墟。云是今川義元戰死之處。余往來其下者數矣。乃作文弔之。曰。嗟。吁。公業承父祖之威震。東西。踐富嶽。爲壘。據天龍。爲池。美哉山河之固。偉矣霸王之基。用之攻人。人何敵。敢禦用之自守。何敵。敢窺。何遽舉三州之地。乃換此數尺之碑。天

トシテ金ト銀トヲ撰
擇スルノ理由ヲ詮
セシムル時ハ金銀ノ
價位ヲ比較シテ之レ
ヲ甲乙スルノ難キ事
及ビ法令ヲ發シテ金
銀ヲ同一ノ契約ニ於
テ價位ノ標準ト爲ス
ノ得策ニ非ラザルコ
トハ容易ニ理解セラ
ル可シ又生徒タル者
ハ造幣局ノ一ノ職分
ハ何事ナルヤヲ認識
スルニ難カラザル可
シ之レニ次ギテ貨幣
ノ價位ニ昇降アルノ
原由ヲ詮證シ且ツ時
價及ビ其昇降ノコト
ヲ熟知セシメ此ニ至
レバ信用ノ功用ヲ攻
究シ其之レヲ誤用ス
ルノ不幸ナル成蹟ヲ
其本原ニマテ釋尋ス
可シ之レニ次ギテ所
謂貨幣市場ノ壓迫

徐々 シツシツ
從容 ユツタリシ
稱揚 ホメツヤス
衝突 ツキアタル
俊秀 スグレヒイ
殊色 スグレタル
逡巡 アトシサリ
循良 ウマレツキ
スナホナル

ひ之部
微運 フシアハセ
裨益 タスケトナ
比較 クラメル

不可怨公實自災古不云乎見小敵不侮臨
大事而懼魯侯之失胃育吏刺其無豫吳王之傷
指腐令譏其不虞全忠之大被亞兒族滅本初之強
遭阿瞞剪除豈不察胡離嘯門有猾夏之相虎子
落落有食牛之氣歟夫蜂蠆有毒智士畏之螾螂
當轍英君避之唯驕者不然或欲投鞭斷江流
或欲折箠擊賊師舉足之高侮彼有謀處心
之粗致我無備是以龍日濟河陷二怯夫之計龐涓
入險成堅子之名公無耳乎不聞既往之敗公無
自乎不見將然之形豈無長槍與大劍豈無壯馬
與強兵唯公之視不遠公之鑒不明其如何之
哉公之先人有云文學不通武道無利公忽棄而不
省惡在其爲子孫嗚呼山河寂寞誰慰公魂一靈冷
々兮嘆鶴雲漢々兮鳴猿吊公而不及書以警後
昆

商業崩潰、商業ノ轉
變及ビ恐慌ノ理由ヲ
詳細ニ詮證シ之レヲ
救ハンニハ唯少年ノ
教育ヲ改良シテ以テ
其信實正直ノ心ヲ涵
養スルノ外ニ途ナキ
コトヲ覺悟セシム可
シ之レニ次ギテ負債
ノ償却ニ關スル法律
ノ便不便ヲ詮證シ又
社會ノ經濟ニ於テ政
府ノ爲ス可キ職分ヲ
モ詮證ス可シ又之レ
ニ次ギテ爲替手形
爲替ノ割合、遠國間
ノ爲替ノ利子、銀行
及ビ銀行ノ事業ヲモ
遞次ニ之レヲ詮證シ
又政府ガ高利ヲ禁ズ
ルノ法律ヲ發行シ及
ビ銀行ヲ管理制限セ
ント企ツル所ノ法律
ノ得策ニ非ラザルコ
トヲ明白ニ了解セ

尾撃 オヒウチ
秘訣 アウギ
皮相 ウハベノカ
微衷 寸志ナリ
畢竟 ツマムルトコ
匹敵 アヒテトナ
彌縫 トリナシ
擯斥 オヒヤル
敏捷 スバヤキ
糜爛 タバレル
鄙吝 ヤバサカナ
之部
朦朧 オボロニク
ラキサマ

◎祭周瑜文
維大漢建安十五年南陽諸葛亮謹以清酌庶羞之儀
致祭於大都督公瑾周府君靈前曰嗚呼公瑾不幸夭
亡修短故天人非不傷我君寔愛酌酒一觴君其
有靈享我蒸嘗吊君幼學以交伯符仗義疎財
讓舍以居吊君弱冠濟會風雲定建霸業
割據江南吊君壯力遠鎮巴丘景外懷慮討虜
無憂吊君手度佳配小喬漢相之婿不愧當朝吊
君氣概主不納質始不垂翅終能奮翼吊君鄙
陽蔣幹來說府君納舌事主終濟吊君弘才文武
籌畧邇々小子心寒膽落昭君凜々公獨諤々火攻
破敵挽強爲弱想君當年雄資英發哭君早逝
俯地流血忠義之心英靈之氣命終三紀名垂百
世哀君情切愁傷千結惟我肝膈悲無斷絕昊天

シム可シ又紙幣及ビ其發行者ノ契約、其契約ニ背クノ不正、無學或ハ不正ニヨリ此契約ニ背キタル者ノ負フ可キ義務ニ就テ之レヲ效ヘ又歴史中ヨリ例證ヲ引キテ以テ之レヲ解説ス可シ之レニ次ギテ外國交易ノコトヲ解説シ其淵源并ニ其存在スル所以ヲ論シ恣ニ外國交易ニ關涉スル政府ノ處置ノ得策ニ非ラザルコトヲ解説ス可シ又歲入ヲ擧グ可キ適當ナル方法ヲ詮議シ之レニ次ギテ公私共ニ其歲出ヲ處理ス可キ最良法ヲ考究ス可シ

經濟學ノ學校課程ハ以上述ブル所ノ問題ヲ以上略記シタル順

摸擬 フマチルナリ
 默許 シラヌフリ
 糶糊 ケムリノヤ
 悶絕 カナラヌヤ
 悶着 シミキチウ
 摸範 テホン
 目途 目的ト同シ
 悶躑 タウチマハ
 沐浴 カミチアラ
 蒙塵 天子ノゴナ
 目擊 メノマヘニ
 門閥 イヘガラ

昏蕩三軍愴然主已哀泣更皆淚漣亮也不才問計
 求謀助吳拒曹輔漢安劉特角之援首尾相儔
 彼若存亡何慮何憂嗚呼公瑾生死永別朴守
 其真冥々滅々魂如有靈以鑑我心從此天下
 再無知音嗚呼哀哉伏惟尙饗

◎祭田橫墓文

貞元十一年九月愈如東京道出田橫墓下一感橫義
 高能得士因取酒以祭爲文而弔之其辭曰
 事有曠百世而相感者余不自知其何心非今世
 之所稀孰爲使余歎歎而不可禁余既博觀乎
 天下曷有庶幾乎夫子之所爲死者不復生嗟余去
 此其從誰當秦氏之失鹿得一士而可王何五百
 人之擾々而不能脫夫子於劍鋌抑所寶之非
 賢亦天命之有常昔闕里之多士孔聖亦云其違々

序ニ於テ授クレバ之レヲ終ル者トス然レテ此ノ學ノ眞理ヲ盡ク習熟シタリトハ云フ可カラズ蓋シ生徒ニシテ以上述ベタル處ノ課程ヲ全ク習熟セバ以テ日常世路ノ方向ヲ定ムルニ大ニ益スル所アル可キナリ故ニ斯學ノ教授其宜シキヲ得バ少年ノ精神ヲ一邊ノ利己主義ニ偏セシムルノ患ナク却リテ他ノ學科ニ因リテ得可カラザル意見ノ廣大、情性ノ寬裕、及ビ決斷力ノ正確ヲ發達伸暢スルノ利益實ニ淺少ナラザルナリ

◎古今名士畧列傳
 ○和氣清盛

門地 上ニ同シ
 世之部
 精巧 コマカクダ
 贅言 ムダゴト
 正鵠 マトノマン
 誠實 マコトナル
 星霜 トシツキ
 脆弱 モロクヨヲ
 整然 モノノヨク
 靜謐 ヨノシヅカ
 聲援 チカラゾヘ
 清廉 カコナヒノ
 紹介 トリモチ、
 ハシリダシ

苟余行之不迷雖顛沛其何傷自古死者非一夫子至今有耿光踞陳辭而薦酒魂髣髴而來享

◎祭石曼卿文

嗚呼曼卿生而爲英死而爲靈其同乎萬物一生死而復歸於無物者暫聚之形不與萬物共盡而卓然其不朽者後世之名此自古聖賢莫不皆然而著在簡冊者昭如日星嗚呼曼卿吾不見子久矣猶能彷彿子之平生其軒昂磊落突兀崢嶸而理藏於地下者意其不化爲朽壤而爲金王之精不然生長松之千尺產靈芝而九莖奈何荒烟野蔓荆棘縱橫風淒露下走燐飛螢但見牧童樵叟歌唸而上下與鷲禽駭獸悲鳴躑躅而呻嚶今固如此更千秋而萬歲兮安知其不穴藏狐貉與鼯鼯此自古聖賢亦皆然兮獨不見夫壘々平曠野與荒城嗚

舊姓ハ磐梨別公、後ニ藤野別真人ト改ム
 孝謙、淳仁、稱徳、光仁、桓武ノ五朝ニ歴仕シ延暦十八年卒ス享年六十七

○楠正成
 本姓ハ橋、永仁二年河内國石川郡山井ニ生ル後醍醐帝ニ仕ヘテ北條氏ヲ亡ボシ中興ノ元勳古今ノ忠臣ナリ延元元年五月廿五日攝州湊川ニ於テ戰歿ス年四十三

○新田義貞
 姓ハ源、上州新田郡ニ生ル元興ノ乱大義ヲ唱ヘテ北條氏ヲ亡ボシ後醍醐帝ニ仕ヘ忠節類ヒナシ正平四年七月二日越前國藤島ニ於テ戰死ス時ニ年三十八

呼曼郷。盛衰之理。吾固知其如此。而感念疇昔。悲涼淒滄。不覺臨風而墮淚者。有愧夫太上之忘情。尚饗。

○祭范穎川文

嗚呼我公。一世之師。由初迄終。名節無疵。明肅之盛。身危志殖。瑤華失位。又隨以斥。治功亟聞。尹帝之都。一閉。興良。稚子歌呼。赫赫之家。萬首俯趨。獨繩其私。以走江湖。士爭留公。蹈禍不標。有危其辭。謂與俱出。風俗之衰。駭正怡邪。蹇々我始。人以疑嗟。力行不包。慕者興起。儒先西々。以節相侈。公之在貶。愈勇爲忠。稽前引古。誼不營躬。外更三州。施有餘澤。如醜江河。以灌尋尺。宿職自解。不以利加。猾盜涵仁。終老無邪。講藝絃歌。慕來千里。溝川障澤。田桑有喜。戎孽猖狂。敢騎我

本ト三宅氏、備前ノ兒島ニ生ル元弘ノ乱大ニ忠節ヲ顯ハス後醍醐、後村上、後龜山ノ三朝ニ仕ヘ屢足利ノ軍ト戰フ終ハル處ヲ知ラズ

○楠正行
 正成ノ長子ナリ父ノ遺志ヲ襲キ南朝ニ仕ヘテ忠義無二正平三年正月河内國四條畷ニ於テ足利ノ勢ヒ戰歿ス時ニ年二十二

○名和長年
 其先村上氏、伯耆國名和ニ生ル元弘ノ乱後醍醐帝ニ仕ヘテ忠節ヲ盡ス延元元年足利尊氏ヲ京師ニ攻メ大宮巷ニ於テ戰歿ス

○六條忠顯
 姓ハ源、後醍醐帝ノ朝ニ仕ヘ元弘ノ乱大ニ忠功アリ延元元年

世態 世ノ中ノアリサマ
 節義 ミサチチマモリギチマ
 節操 ミサチ
 接戦 テヅメノイ
 接續 ツヅク、ツナグ
 絶倒 テノケラヒ
 切迫 サシツマル
 絶倫 オホクノ人ヨリメキ出
 捷徑 チカミチ
 嬋娟 シノウツクニ云
 漸進 シユンジュニニストム
 旋轉 クルクルマ
 煽動 アフギタテ

○古今名士異列傳
 祭范穎川文
 百九十七

足利ノ兵ヲ防ギ利アラズ戰歿ス

○北畠顯家

姓ハ源、後醍醐帝ノ朝ニ仕ヘ元弘ノ乱大ニ忠勤ヲ盡クス延元三年五月足利ノ兵ヲ泉州阿倍野ニ邀ヘ撃チ利アラズ戰歿ス時年二十一

○徳川光圀

徳川家康ノ孫ニシテ舊水戸藩主タリ夙ニ勤王ノ志深ク皇室ヲ尊敬シ大ニ盡クス所アリ元祿十三年十二月歿ス年七十三

○中山親愛

光格天皇ノ朝ニ仕ヘ皇室ノ式微ヲ憂ヘ勅命ヲ奉ジテ關東ニ下リ徳川氏ヲ説服シ大ニ勤王ノ功ヲ效ス維新復古ノ基君與リテ大ニ力アルナリ世ニ

阡陌
ミチ
タテヨコノ

潛伏
カクレル

僭踰
ミヤンチコヘテスル

僭越
上ニ同ジ

先鞭
サキガケ、
メケガケ

戰慄
フルヒワナ
ナク

謫劣
チエガクモ
チノアサク
オトルル

潺湲
ホソチヨロ
チヨロトナ
ガレルサマ

餞別
ハナムケノ
ガクリモノ

先登
イチバンノ
リイイチバ
ンガケ

鮮血
ナマチ、イ
キチ

捷利
勝利ニ同ジ
ニカナテリ
エキナエ

○弔千古戰場文

浩浩乎平沙無垠。覓不見人。河水縈帶。群山糾紛。黯兮慘悴。風悲日曛。蓬斷草枯。凜如霜晨。鳥飛不。下。獸挺亡群。亭長告余曰。此古戰場也。常覆三軍。往々鬼哭。天陰則聞。傷心哉。秦歟漢歟。將近代歟。吾聞夫齊魏密成。荆韓召募。萬里奔走。連年暴露。沙草晨牧。河冰夜渡。地澗天長。不知歸路。寄身鋒刃。一。臆。誰訴。秦漢而還。多事四夷。中州耗散。無世。無之。古稱。戎夏不抗。王師。文教失宜。文臣用。奇兵。有異。於仁義王道。迂濶而莫爲。嗚呼噫嘻。吾想。夫北風振。胡兵伺便。主將驕敵。期門受。野。堅。旌。旗。一。川。迴。組。練。法。重。心。駭。威。尊。命。賤。利。鏃。穿。骨。驚。沙。入。面。主。客。相。搏。山。川。震。眩。聲。柝。江。河。勢。崩。雷。電。至。若。窮。陰。凝。閉。凜。冽。海。隅。積。雪。沒。脛。堅。冰。

傳ヘテ中山殿中問答ト稱スルハ當時ノ事蹟ヲ述ブルモノナリ

○高山彦九郎

上野國新田郡細谷村ノ人ナリ正之ト稱ス夙ニ勤王ノ志深ク諸國ヲ經歷シテ大ニ人心ヲ鼓舞シ雄名一時ニ鳴ル寛政五年皇家ノ式微ヲ嘆ズル餘途ニ筑後國ニ於テ自及ス時ニ年四十

○蒲生君平

名ハ秀實字ハ君藏伊三郎ト稱ス下野國宇都宮ノ人ナリ常ニ皇室ノ陵夷ヲ歎ジ書ヲ著ハシテ京師及ビ幕府ノ官吏ニ衷告ス用キラレズ然レテ勤王ノ士氣ヲ振起セシ功實ニ少カラズ文化十年七月卒去ス年四十六ナリ

說破
人ノロンチ
イヒヤナル

折衷
ナカホド、
コロアヒ

絕景
スグレタル
ケシキ

寂寞
モノサビシ
キサマ

寂寥
上ニ同ジ

唯類
イキモノ、
人奇ト云フ
ニ同ジキナリ

哨兵
ミハリノ兵
バン兵

召募
メシツノル
メル
ヨビアツ

繡條
シメヤカ
モノサビシ

井樓
ヤガラ

青樓
アゲヤ、カ
チヤヤ

省略
ハアクコト
ノゾキヘ

在巖鷲鳥休巢。征馬踟躕。繪續無温。墮指裂膚。當此苦寒。天假強胡。憑陵殺氣。以相剪屠。徑截輜重。橫攻士卒。都尉親降。將軍復沒。屍積巨港之岸。血滿長城之窟。無貴無賤。同爲枯骨。可勝言哉。鼓衰兮力盡。矢絀絕。白刃交兮寶刀折。而軍威兮生死決。降矣哉終身夷狄。戰矣哉暴骨沙磧。鳥無聲兮山寂々。夜正長兮風淅々。魂魄結兮天沈々。鬼神聚兮雲霧々。日光寒兮草短。月色苦兮霜白。傷心慘目。有如此耶。耶。吾聞之。牧用趙卒。大破林胡。開地千里。遁逃匈奴。漢傾天下。財殫力痛。任人而已。其在多乎。周逐獫狁。北至太原。既城朔方。全師而還。飲至策勳。和樂日閑。穆々棣々。君臣之間。秦起長城。竟海爲關。荼毒生靈。万里朱殷。漢擊匈奴。雖得隱山。枕骸遍野。功不補患。蒼々亟民。誰無父母。提携捧負。畏其不壽。誰無兄弟。如足如手。

○林子平
名ハ友直仙臺ノ人ナ
リ夙ニ志チ大義ニ存
シ外夷ノ東洋ヲ窺フ
ヲ憤リ書ヲ著シ爲メ
ニ禁錮ノ罰ヲ受ク後
テ病ノ爲メニ卒ス年
四十有餘世ニ高山、
蒲生、君ノ三子ヲ稱
シテ寛政ノ三偉人ト
稱セリ

○頼山陽
名ハ襄字ハ子成久太
郎ト稱ス安永九年ニ
生ル常ニ皇家ノ衰微
ヲ歎シ書ヲ著シテ大
ニ勤王ノ志ヲ述ブ天
保三年九月京都三本
樹ノ家ニ卒ス享年五
十三

ノ志深ク天下ノ名士
ト交ル鎮國攘夷ノ利
害ヲ講シ世ヲ益スル
功大ナリトス文久甲
子六月京都木屋町ニ
於テ刺客ノ爲メニ害
セラル時ニ年五十四
○藤田東湖
名ハ彪字ハ斌郷通稱
虎之助東湖ハ其號ナ
リ水戸ノ藩士文武ノ
學ニ長ズ安政乙卯十
二月二日江戸小石川
藩邸ニ卒ス年五十
○吉田松陰
名ハ矩方字、義郷通
稱寅次郎長州萩ノ人
ナリ本姓ハ杉氏出テ
吉田氏ヲ嗣グ勤王
ノ志深ク憤慨ノ餘リ
時ノ閣老間部詮勝ヲ
刺サントシテ成ラス
安政六年十月廿七日
江戸傳馬中ノ獄中ニ
斬ラル年二十九

生來 ヲマレツキ
先考 ナクナリタ
先妣 ナクナリタ
先輩 又ハモノゴ
トノオノレヨリス
青陽 春ノ異名

樞要 モノゴトノ
素見 ミテカハマ
寸陰 スコシノヒ
寸隙 同上又ハス
寸功 ルテサカナ
推考 カシハカリ

瑞相 メテタキシ
推戴 オシイタ
衰頹 オトロヘユ
揣摩 オシハガル
吹擧 人チヤクニ
推薦 上ニ同シ
推測 推量ニ同シ
推察 上ニ同シ
推參 フレヨリタ
醉狂 サケニエヒ
粹狂 モノズキ

誰無夫實。如賓如友。生也何恩。殺之何咎。其存其沒。家莫聞知。人或言。將信將疑。情々心目。寤寐見之。布奠傾觴。哭望天涯。天地爲愁。草木淒悲。弔祭不至。精魂何依。必有凶年。人其流離。嗚呼噫嘻。時邪命邪。從古如斯。爲之奈何。守在四夷。

○祭歐陽文公文
嗚呼哀哉。公之生於世六十有六年。民有父母。國有耆龜。斯文有傳。學者有師。君子有所恃。而不恐。小人有所畏。而不爲。譬如大川喬嶽。不見其運動。而功利之及於物者。蓋不可以數計。而周知今而之沒也。赤子無所仰。朝廷無所稽疑。斯文化爲異端。而學者至於用夷。君子以爲無爲。爲善而小人沛然自以爲得。時譬如深淵大澤。龍亡

而虎逝。則變化雜出。舞鱗鱗。而號狐狸。昔其未用也。天下以爲病。而其既用也。則又以爲遲。及其釋位而去也。莫不冀其復用。至其請老而歸也。莫不惆悵失望。而猶庶幾於萬一者。幸公之未衰。孰謂公之無復有意於斯世也。奄一去。而莫予追。豈厭世之濁。潔身而逝乎。將民之無祿。而天莫之遺。昔我先君懷寶遁世。非公則莫能致。而不肖無狀。因緣出入。受教於門下者。十有六年於茲。聞公之喪。義當匍匐往弔。而懷祿不去。愧古人以忸怩。緘詞千里。以寓一哀而已。蓋上以爲天下。慟而下以哭其私。

○祭三軍牙六蠶之神文
惟神秉揚神武。三軍司命。今制度聿新。威靈不振。伏惟仰鎮國家。緝定禍亂。平服蠻夷。以永無窮。

◎古今名士列傳

◎之部

◎祭歐陽文公文

二百一

○僧月照
名ハ忍向京都清水寺
成就院ノ僧ナリ夙ニ
尊王ノ志ヲ懷キ遂ニ
幕府ノ忌ム所トナリ
遁レテ西國ニ赴キ道
海ニ投ジテ死ス時ニ
安政五年十一月十五
日享年四十六

○三條實萬
公ハ世々朝臣タリ光
格仁孝光明ノ三朝
ニ歷仕シ皇家ノ爲メ
ニ盡クス最モ丕ヒナ
リ安政六年十月一乘
村ノ閑居ニ薨ズ年五
十八

○島津久光
舊薩摩藩主宰相齊興
ノ三子ニシテ文化十
四年十月廿四日ヲ以
テ生ル夙ニ勤王ノ志
厚ク明治維新ノ元勳
タリ明治二十年十二
月薨ズ

隨一
寸衷
數奇
隨行
推敵
水伯
水手
水師
水魚

○梁川星巖
名ハ孟緯字ハ公圖一ノ字ハ無象新
十郎ト稱ス美濃國安八郡會根村ニ
生ル性慷慨ニシテ勤王ノ志深ク幕
府ノ爲メニ忌マル安政五年九月京
都ニ於テ歿ス享年七十

○竹内式部
越後ノ人又丹波ノ人トモ稱ス常ニ
皇室ノ式微ヲ嘆ジ幕府ノ爲メニ忌
マル寛政十二年信州諏訪ニ於テ卒
ス時ニ年九十

○山縣大貳
諱ハ昌貞江戶ノ人ナリ夙ニ勤王ノ
志厚ク幕府ヲ覆サントスルノ謀顯
ハレ明和四年八月幕府ノ爲メニ死
刑ニ處セラル

○渡邊華山
名ハ定靜字ハ子安又ノ字ハ伯登通
稱ハ登參州ノ人ナリ夙ニ世濟ノ志
アリ幕吏ノ爲メニ憎マレ三州田原
ニ幽屏セラル華山憤激シ自及ス時
ニ天保十二年十一月ナリ

○高野長英
名讓、瑞阜ト稱ス江戶ノ市醫ナリ
文化元年五月五日陸中國水澤ニ生

之休一尙
祭楊僕射文

祭楊僕射文

嗚呼、貞元中歲、公既爲郎、始獲趨門、仰公之光、遂假薦言、幽蟄用彰、德惠之厚、身沒敢忘、公以直道於南、出藩、謬管記室、日陪討論、舊政多疵、如三絲之棼、與賢共謀、穢滌榛燔、監戒戾強、陰附包奸、潛々疑危、處之若閑、拜兼百流、清濁終分、賓主之義、由茲益敦、公自登朝、急於謝政、善接交、友居宦、恪敬温然、如春、柔立不佞、坐直、屢退、進匪由競、更歷中外、聲華日盛、咸期作相、爲國之慶、宜而不居、斯可云命、知足告休、頤養於家、子爲侍郎、光耀芬葩、亦列卿曹、秩祿且多、孫童滿前、園沼經過、門吏盈朝、宴賞有加、宜哉萬壽、吉慶靡他、棄此弗顧、哀哉奈何、嗚呼哀哉、卜筮叶、

期返宅於榮、朝復守郡、居不敢寧、追懷恩舊、船在郊垌、承教紀績、刻揚德馨、縞服前導、盡哀墓庭、尙或監此、公平有靈、嗚呼哀哉、尙饗

祭萬古齋文

庚申之歲、余客陽羨、公來顧余、寔始識面、識面之初、遂以知心、朱絃白雪、相與賞音、惟公老成、行方志古、余也何人、自知疎鹵、豈足裨公、辱三公、節取過、則相規、善則相許、一日過余、奉幣以告、余有二子、煩君教詔、佛盧仙洞、水曲山幽、携壺擔盒、與余相邀、花木玲瓏、禽鳥啾啾、流目傾耳、永日遊遨、或時閉門、對坐一室、奇文共賞、疑義與析、清言不足、或繼以奕、晨食相逢、忽焉日昃、余有所往、不告於僮、僮來相尋、知必在公、居命家人、爲具客食、家人不問、知余爲客、網繆

○諸學科大意

○祭楊僕射文
○祭萬古齋文

ル夙ニ世濟ノ志アリ幕府ノ忌ム所トナリ嘉永三年十月江戸青山ニ於テ自及ス享年四十七

○德川齊昭

字ハ子信、景山又潜龍閣ト號ス幼名敏三郎舊水戸藩主ナリ寛政十二年三月十二日江戸磯川ノ邸ニ生ル終生皇室ノ爲メニ盡忠ノ功顯著ナリ嘉永六年八月水戸ノ居城ニ薨ズ享年六十一

○頼三樹三郎

名醇字ハ不春、鴨厓、又古狂生ト號ス文政八年京都三本木町ニ生ル尊王攘夷ノ說ヲ唱ヘ幕府ノ爲メニ江戸ノ獄ニ斬ラル享年三十五

○僧月性

字ハ知圓、清狂ト號ス周防國大島郡遠崎村西本願寺派妙圓寺ノ主ナリ大ニ世濟ノ志アリ安政五年五月京都ニ卒ス年四十二

○鍋島閑叟

名ハ齊正舊肥前佐賀ノ藩主ナリ王事ニ勤勞スルコト多年王政復古ノ大業ヲ翼賛シテ偉勳ヲ奏セラル

○三條實美

公ハ三條實萬ノ四男ニシテ天保八年二月四日京都ニ生ル明治維新ノ元勳ヲリ明治廿四年二月十八日東京ニ於テ薨ズ享年五十五

○錦小路頼徳

姓ハ丹波、字ハ一貫、翠園ト號ス夙ニ勤王ノ志深ク王政復古ノ偉勳アリテ功アリ元治元年四月廿四日馬關ニ歿ス享年三十

○松平春嶽

諱ハ慶永幼名錦之丞田安齊郷ノ子文政十一年九月江戸ニ於テ生ル出テ越前福井侯ノ嗣トナル明治維新ノ偉勳大ニ功勞アリ明治廿三年六月二日東京ニ於テ薨ズ享年六十三

○山内容堂

公名ハ豊信幼字ハ輝衛又兵庫之助ト稱ス舊高知藩主ナリ文政十年十月生ル明治維新ノ偉勳與リテ功アリ明治五年六月一日薨ズ享年四十六

○大久保利通

始メノ名ハ利濟通稱ハ正助後チ一

◎古今名士列傳

往復踰四五年。曾無一日曠不周旋。公訓桐廬。余赴宮寮。心豈不邇。其他則遙。速公解官。余亦屏居。握手一笑。歡言如初。通家之誼。婚媾自此。公有孫女。以字吾子。朋友或言。師生之拘。公曰。何傷。古有二蔡朱。尙期白首。頼公劇勵。公不我留。忽焉厭世。屬續以前。神氣清晶。顧謂二子。事豈有了。荆溪山水。昔陪公遊。余今復來。愴公其休。死生常理。抑亦何怪。不致負公。特此心在。與公二子。敢忘切磋。尊聞行知。失言勿磨。窀穸在茲。舉我觴奠。叙往悵。今公其我鑒。

◎祭吳次尾文

壬辰十月日梁園候方域。即陽羨爲文而三灑酒。祭於先友吳君次尾。曰嗚呼。次尾死矣。余蚤決次尾之死。而次尾果死矣。然余時々見吾次尾。面冷而

蒼髯怒以張。言如風發。氣奮電光。坐於我上。立於我傍。狂醒酣醉。時一呼之。不知吾友之云。亡也。今過陽羨。陳子來迎。憶我三人共學石城。嘗更高歌。聲滿帝京。又同時而幾殺其身乎。大鍼與土英。蓋安樂與患難。同無一之弗并。今次尾竟不見。而獨見。定生。嗚呼。次尾果死矣。因與定生痛哭失聲。君豈聞之耶。是夜即夢。君握余手。曲叙平生。歡笑異常。然則次尾。又未必死也。余向聞君死。嘗就梁園。爲位南望而祭。然不欲爲文者。以未悉授命時本末。恐萬一亂眞。矢吾次尾。今定生乃爲我言。次尾戰敗。危坐正冠。徐起拜。故君一辭。先人引頸就刃。意氣彌振。嗚呼。今而後。吾次尾果死矣。次尾果死。次尾何愁。次尾果死。次尾固在。余與定生。哭者友朋之情。而次尾笑者。蓋夢中猶不屑爲兒女子之態。余與

◎祭吳次尾文

藏ト改ム甲東ト號ス嶋津氏ノ家臣ニシテ天保庚寅ノ年ヲ以テ鹿兒島ニ生ル明治維新ノ元勳タリ明治十一年五月十四日東京ニ於テ刺客ノ爲メニ害セラレ享年四十九

○大村益次郎

名ハ永敏初ノ名ハ村田藏六周防ノ人ナリ明治維新ノ元勳タリ明治二十年十一月十五日京都木屋町ニ於テ賊ノ爲メニ害セラレ享年四十七

○橋本左内

名ハ紀、字ハ伯綱、黎園ト號ス越前福井侯ノ典醫ナリ夙ニ尊攘ノ大義ニ據リ幕府ノ爲メニ忌マレ安政六年十月七日博多獄内ニ斬ララル享年二十六

○武田耕雲齋

名ハ正生、一ニ如雲ト云ヒ伊賀守ト稱ス初ノ名ハ彦九郎舊水戸藩士ナリ夙ニ勤王ノ志厚ク主候ヲ翼ケテ功勞アリ後チ奸黨ノ爲メニ陥入ラレ慶應元年二月三日越前敦賀ニ於テ幕吏ノ爲メニ刑セララル享年六十二

○平野國臣

定生之於次尾。交親茫張。一生一死。拜墓加封。當在君里。以君之神。乘雲策暑。今古蜉蝣。乾坤糠粃。方且無所不之。而又何必池陽之爲桑梓也。次尾念我與定生。別垂一紀。安知不巳。駕池陽。過陽羨。格止觀止。特我與定生。不能見爾。嗚呼。次尾讀三萬卷書。識一字。是明三百年獨養此士。

○祭王方伯文

惟公早歲奮跡甲科。踔勵風發。令聞孔多。始蒞永康。民載其德。疆理其田。石不可泐。分二部。南都。以釐餘皇。奔走江湖。啓處不違。武寧王家。勳貴無二。獨繩其私。率屈以義。干越之臬。遂視南海。離政既通。黎亦知悔。愛節章貢。威稜日著。帝在簡在。命端臺叙。公起諸儒。武服之共。愛人下士。所向有功。桃源華林。大帽狂狷。旗旌一麾。首駢頸繫。

名ハ次郎、獨醒軒ト號ス舊福岡藩士ナリ文政十一年三月ヲ以テ生ル本姓ハ能榮脫藩シテ改姓ス尊王攘夷ノ志厚ク元治元年七月獄中ニ斬ラル時ニ年二十九

○津崎村岡女

西京ノ人近衛公ノ老女ナリ常ニ朝威ノ衰替ヲ嘆ジ四方ノ志士ト交リ頗ル忠節ヲ盡クス明治六年八月卒ス年八十八

○小原鐵心

名ハ忠寬字ハ栗郷二兵衛ト稱ス舊美濃大垣藩ノ名士ナリ明治維新ノ際頗ル王家ニ盡クス後チ疾シテ歿ス年五十六

○大橋順藏

名ハ正順字ハ周道、訥庵ト號ス江戸ノ人尊王攘夷ノ志厚ク閣老安藤對馬ヲ刺サントシテ事知ラレ藩邸ニ幽セラレ卒ス年四十七

○松本圭堂

名ハ衡字ハ士權通稱ハ謙三舊三州刈谷藩士ナリ尊王ノ志厚ク後チ大和ノ義舉戰利アラズシテ自刃ス時文久三年九月廿四日享年二十四

○古今名士畧列傳

○せ之節

○祭王方伯文

二百七

帝嘉其體。俾藩於演。乃以將父。弗究其年。自公之沒。垂四十載。士習選悞。孰知敵愾。海島小夷。敢齷我疆。於今年。我武未揚。故老流涕。思得三公等。適會里正。薦公尊鼎。惟公孝友。宗黨所稱。况復才傑。起慕後人。公有令孫。辱之交游。故進斯文。以侑醪羞。尙享。

○祭呂東萊文

惟兄天資之高。地望之最。學力之深。心事之偉。無一不具。其來未已。群賢凋謝。屹然山詩。兄又棄去。我存曷以。一代人物。風流盡矣。生也何爲。莫解此理。彼豈無人。懼非書耳。昔兄之存。衆慕如蟻。我獨縱橫。無所統紀。如彼扁舟。亂流而濟。觀者聳然。我行如砥。事固多變。中江乃爾。三日新婦。請從。今始念此。哽咽。淚落如洗。卮酒豆肉。非以爲禮。

陳

亮

○久坂玄瑞

名ハ通武字ハ實市江月齋秋湖ト號ス後ヲ義助ト稱ス長州ノ人ナリ夙ニ勤王ノ大義ヲ唱ヘ後ヲ藩主ノ冤ヲ闕下ニ衷願セントシ會桑兩藩ノ兵ニ拒マレ戰利アラズ自及ス時ニ年二十六

○梅田雲漢

名ハ定明通稱ハ源次郎若狹ノ人ナリ夙ニ尊王攘夷ノ志深ク幕府ノ爲メニ忌マレ捕ヘラレテ獄中ニ卒ス時安政六年九月十四日年四十四

○武市 半平太

諱ハ小楯、瑞山ト號ス又吹山、茗湖等ノ別號アリ舊高知藩士ナリ尊王ノ大義ヲ唱ヘ大ニ努ム後ヲ藩廳ノ爲メニ捕ヘラレ獄中ニ歿ス時ニ慶應元年五月享年三十七

○戸田 銀次郎

名ハ忠敬後ヲ通稱ヲ忠大夫ト改ム舊水戸藩士ナリ夙ニ勤王ノ大義ヲ唱ヘ藩主ヲ贊ケテ大ニ努ム安政二年十月江戸ニ於テ地震ノ爲メニ壓死ス享年五十二

○中岡 愼太郎

祝詞 近世作文教科書 畢

名ハ道正初メ光次郎ト稱ス舊高知藩士ナリ天保九年安藝國北川郷ニ生ル夙ニ尊王ノ大義ヲ唱フ後ヲ京都ニ於テ刺客ノ爲メニ害セラル時慶應三年十二月享年三十

○安島 帶刀

舊水戸藩士ナリ勤王ノ志厚ク藩主ヲ贊ケテ大ニ努ム後ヲ幕府ノ忌ム所トナリ死ヲ賜フ時安政六年七月廿七日ナリ

○横山 安武

通稱正太郎舊鹿兒島藩士森有恕ノ四子出デ、横山氏ヲ嗣グ維新復古ノ際朝臣ノ遊驕ノ風アルヲ嘆シ諫書ヲ作りテ屠腹ス時ニ明治三年七月ニシテ時人其忠節ニ感シ弊風大ニ改マル

○藤本 鐵石

名ハ眞金通稱津之助都門賣茶翁ト號ス備前岡山ノ舊藩士ナリ夙ニ尊王ノ大義ヲ唱ヘ大和義舉ノ謀主タリ後ヲ戰利アラズ陣歿ス時ニ文久癸亥ノ年九月享年四十七

○黒澤 忠二郎

名ハ勝賢舊水戸藩士ナリ夙ニ皇室ノ式微ヲ嘆シ井伊大老ヲ櫻田ニ要撃シ重傷ヲ蒙リ終ニ卒ス時ニ万延元年七月十二日ナリ

○周布 政之助

名ハ翼字ハ公輔長州ノ人ナリ王政復古ノ際主公ヲ翼ケテ大ニ努ム後ヲ自及ス享年四十三

○清川 八郎

名ハ正明字ハ震志樂水ト號ス羽前東田川郡清川村ノ人ナリ常ニ尊王ノ大義ヲ唱フ文久三年四月江戸赤羽ニ於テ幕府ノ刺客ニ害セラル年三十四

○伴 林六郎

名ハ光平、苦齋、又班鳩隱士ト號ス大ニ勤王ノ說ヲ唱ヘ大和義舉ニ與シ戰利アラズ遁レテ再舉ヲ計ラントス道ニ捕ヘラレ元治元年二月京都ニ於テ斬ラル享年五十二

●學者之部

○王 仁

百濟ノ人ナリ應仁天皇十六年來

朝遂ニ歸化シ經書ヲ皇子及ビ朝臣ニ授ク本邦漢學者ノ祖ナリ

○阿知 使主

漢ノ靈帝ノ曾孫ナリ應仁天皇廿年歸化ス其子孫世々大和ニ居リ史官或ハ博士トナル之ヲ東史部ト云フ

○粟田 真人

天武持統兩朝ニ歷仕ス養老三年ヲ以テ薨ズ

○太安 麿呂

天武、持統兩朝ニ歷仕シ博學ニシテ典故ニ通ズ養老七年卒ス

○舍人 親王

天武帝ノ第三皇子ナリ性聰敏、博學諸書ニ涉ル天平七年ヲ以テ薨ズ年六十

○安倍 仲磨

資性聰明靈龜二年選バレテ遣唐留學生トナリ博學ノ名聲海外ニ轟ク寶龜元年ヲ以テ唐ニ卒ス年七十

○吉備 眞備

本性ハ下道朝臣靈龜二年選バレテ遣唐留學生トナリ經史ヲ研修

○久坂玄瑞

名ハ通武字ハ實甫江月齋秋湖ト號ス後チ義助ト稱ス長州ノ人ナリ夙ニ勤王ノ大義ヲ唱ヘ後チ藩主ノ冤ヲ闕下ニ衷願セントシ會桑兩藩ノ兵ニ拒マレ戦利アラズ自及ス時ニ年二十六

○梅田雲漢

名ハ定明通稱ハ源次郎若狹ノ人ナリ夙ニ尊王攘夷ノ志深ク幕府ノ爲メニ忌マレ捕ヘラレテ獄中ニ卒ス時安政六年九月十四日年四十四

○武市 半平太

諱ハ小楯、瑞山ト號ス又吹山、茗湖等ノ別號アリ舊高知藩士ナリ尊王ノ大義ヲ唱ヘ大ニ努ム後チ藩廳ノ爲メニ捕ヘラレ獄中ニ歿ス時ニ慶應元年五月享年三十七

○戸田 銀次郎

名ハ忠敬後チ通稱チ忠太夫ト改ム舊水戸藩士ナリ夙ニ勤王ノ大義ヲ唱ヘ藩主ヲ贊ケテ大ニ努ム安政二年十月江戸ニ於テ地震ノ爲メニ壓死ス享年五十二

○中岡 慎太郎

祝詞 近世作文教科書 畢

名ハ道正初メ光次郎ト稱ス舊高知藩士ナリ天保九年安藝國北川郷ニ生ル夙ニ尊王ノ大義ヲ唱フ後チ京都ニ於テ刺客ノ爲メニ害セラル時慶應三年十二月享年三十

○安島 帶刀

舊水戸藩士ナリ勤王ノ志厚ク藩主ヲ贊ケテ大ニ努ム後チ幕府ノ忌ム所トナリ死ヲ賜フ時安政六年七月廿七日ナリ

○横山 安武

通稱正太郎舊鹿兒島藩士森有恕ノ四子出デ、横山氏ヲ嗣グ維新復古ノ際朝臣ノ遊驕ノ風アルヲ嘆シ諫書ヲ作りテ屠腹ス時ニ明治三年七月ニシテ時人其忠節ニ感シ弊風大ニ改マル

○藤本 鐵石

名ハ眞金通稱津之助都門賣茶翁ト號ス備前岡山ノ舊藩士ナリ夙ニ尊王ノ大義ヲ唱ヘ大和義舉ノ謀主タリ後チ戦利アラズ陣歿ス時ニ文久癸亥ノ年九月享年四十七

○黒澤 忠三郎

名ハ勝質舊水戸藩士ナリ夙ニ皇室ノ式微ヲ嘆シ井伊大老ヲ櫻田ニ要撃シ重傷ヲ蒙リ終ニ卒ス時ニ万延元年七月十二日ナリ

○周布 政之助

名ハ翼字ハ公輔長州ノ人ナリ王政復古ノ際主公ヲ翼ケテ大ニ努ム後チ自及ス享年四十三

○清川 八郎

名ハ正明字ハ震志樂水ト號ス羽前東田川郡清川村ノ人ナリ常ニ尊王ノ大義ヲ唱フ文久三年四月江戸赤羽ニ於テ幕府ノ刺客ニ害セラル年三十四

○伴 林六郎

名ハ光平、嵩齋、又班鳩隱士ト號ス大ニ勤王ノ説ヲ唱ヘ大和義舉ニ與シ戦利アラズ遁レテ再舉ヲ計ラントス道ニ捕ヘラレ元治元年二月京都ニ於テ斬ラル享年五十二

○王 仁

百濟ノ人ナリ應仁天皇十六年來

○朝途ニ歸化シ經書ヲ皇子及ビ朝臣ニ授ク本邦漢學者ノ祖ナリ

○阿知 使主

漢ノ靈帝ノ曾孫ナリ應仁天皇廿年歸化ス其子孫世々大和ニ居リ史官或ハ博士トナル之ヲ東史部ト云フ

○粟田 真人

天武持統兩朝ニ歷仕ス養老三年ヲ以テ薨ズ

○太安 履呂

天武、持統兩朝ニ歷仕シ博學ニシテ典故ニ通ズ養老七年卒ス

○舍人 親王

天武帝ノ第三皇子ナリ性聰敏、博學諸書ニ涉ル天平七年ヲ以テ薨ズ年六十

○安倍 仲麿

資性聰明靈龜二年選バレテ遣唐留學生トナリ博學ノ名聲海外ニ轟ク寶龜元年ヲ以テ唐ニ卒ス年七十

○吉備 眞備

本性ハ下道朝臣靈龜二年選バレテ遣唐留學生トナリ經史ヲ研修

シ衆藝ニ涉獵ス寶龜六年ヲ以テ薨ズ時ニ年八十三

○石上宅嗣

資性穎悟博シ經史ニ涉リ善ク文ヲ屬シ草隸ニ工ミナリ稱徳光仁兩朝ニ歷仕シ天應元年薨ズ年五十三

○淡海三船

勝寶三年性ヲ淡海真人ト賜フ性聰敏博シ群書ニ涉リ善ク文ヲ屬ス延曆四年ヲ以テ卒ス年六十四

○小野篁

性剛直不羈世ニ容レラズ博學ニシテ文章ハ當時ニ冠絶シ草隸ハ二王ノ迹アリ後世之ヲ模範トス又書ヲ善クシ特ニ佛畫ニ長ズ仁壽二年薨ズ年五十一

○都良香

初ノ名ハ言道人ト爲リ博聞強記善ク文ヲ屬ス元慶三年卒ス時ニ年三十六

○菅原道真

博識大才宇多、醍醐兩朝ニ歷仕シ忠勤比ナシ累進大臣大將トナル後チ藤原時平ノ讒ニ遇ヒ筑紫

ニ左遷ス延喜三年貶處ニ薨ズ年五十九

○紀長谷雄

字ハ寬、性英敏文藻ニ富ム寬平ノ朝大學頭タリ詔勅表牋ハ多ク君ノ手ニ成ル延喜十三年薨ズ年六十八

○大江匡房

穎悟絶倫博識強記和歌ニ巧ミニ最モ詩文ヲ善クス天永二年薨ズ年七十一

○北畠親房

一ノ家號ヲ中院ト稱ス姓ハ源、伏見、後伏見、後二條、花園、後醍醐ニ歷仕ス勤王ノ志厚ク性博聞強記古今ニ通ズ正平九年賀名生ニ薨ズ

○藤原愷窩

名ハ肅字歛夫播磨ノ人性穎悟本邦儒學中興ノ泰斗タリ元和五年卒ス年五十九

○中江藤樹

名ハ原字ハ惟命近江ノ人文武ノ學ニ通ズ性溫厚、躬行ヲ先ニシ文詞ヲ後ニス世稱シテ近江聖人

ト云フ慶安元年卒ス年四十一ナ

○林羅山

名ハ忠、一ノ名ハ信勝字ハ子信京都ノ人性英邁絶倫博識曠世ノ才アリ四書新註ヲ講説ス明曆三年ヲ以テ卒ス年七十五

○朱舜水

名ハ之瑜字ハ魯璣明國ノ人万治二年歸化ス天明二年ヲ以テ江戸ニ卒ス年八十三

○山崎闇齋

名ハ嘉字ハ敬義又垂加ト号ス性剛毅不撓深ク程朱ノ學ヲ極ム天和二年卒ス年六十五ナリ

○熊澤蕃山

名ハ伯繼字ハ了介京都ノ人天性深沈備才古今ニ卓越ス元祿四年卒ス年七十三

○木下順庵

名ハ貞幹字ハ直夫又錦里ト号ス性聰明卓犖、特ニ詩文ニ長ズ元祿十二年ヲ以テ卒ス年七十八

○伊藤仁齋

名ハ維楨字ハ原佐又古義堂ト號

ス 京都ノ人性深沈、博識ナリ德聲一時ニ隆シ寶永二年卒ス年七十九

○貝原益軒

名ハ篤信字ハ子信筑前ノ人性謙遜博識而モ自ラ深ク韜晦ス正徳四年ヲ以テ卒ス年八十五

○新井白石

姓ハ源、名ハ順、一ノ名ハ君美字ハ在中江戸ノ人性穎敏、博識、兼テ蘭學ヲ講ズ則チ我國洋學ヲ唱起スルノ權輿ナリ享保六年ヲ以テ卒ス年六十九

○萩生徂徠

姓ハ物部名ハ双松字ハ茂郷又ノ號ハ護園江戸ノ人性聰明岐嶷銳意聖學ヲ復スルヲ以テ自ラ任ズ享保十二年卒ス年六十三

○室鳩巢

名ハ直清字ハ師禮一ノ字ハ汝玉又滄浪ト号ス江戸ノ人性聰悟博識多聞ナリ享保十九年卒ス年七十七

○伊藤東涯

名ハ長胤字ハ原藏京都ノ人ナリ

性博聞強記善ク文ヲ勵シ經術ニ精シ元文元年ヲ以テ卒ス年六十七

○太宰春臺

名ハ純字ハ徳夫信濃ノ人性博學洪識、天下ノ諸學ニ通ズ延享四年卒ス年六十八

○山縣周南

名ハ孝儒字ハ次公長州ノ人夙ニ經史ヲ涉獵ス聲譽藹然一時ニ著ハル寶曆二年ヲ以テ卒ス年六十六

○雨森芳洲

名ハ東字ハ伯陽京都ノ人才藻卓絶兼テ外國ノ語ヲ善クス又國歌ヲ練習ス寶曆五年ヲ以テ卒ス年八十八

○服部南郭

名ハ元喬字ハ子選京都ノ人ナリ人ト爲リ冲雅磊落、學博クシテ而モ自ラ韜晦ス寶曆九年ニ卒ス年七十七

○西山拙齋

備中ノ人ナリ人ト爲リ方正敦厚博ク諸學ニ通ズ寛政十年卒ス年

六十四

○中井竹山

大阪ノ人宋學ヲ修メ兼テ詩文ヲ善クス文化元年ヲ以テ卒ス年七十五

○柴野栗山

讃岐ノ人ナリ經籍ニ耽思シ傍ラ詩文ヲ善クス文化四年ヲ以テ卒ス年七十二

○山本北山

江戸ノ人博通精核諸藝兼テ通ズ文化九年卒ス年六十一

○太田錦城

加賀ノ人ナリ性穎悟學藝淵博尤モ經術ニ長ズ文政八年卒ス年六十一

○頼山陽

三十六峯外史ト號ス安藝ノ人ナリ性銳敏嶄然頭角ヲ現ハス博識ニシテ著作多シ天保三年卒ス年五十三

○佐藤一齋

舊岩村藩士博識文藻ニ富ム安政六年卒ス年八十八

○安積良齋

名ハ信字、思順興州ノ人ナリ安政六年卒ス

○齊藤拙堂

伊勢ノ人博聞強記ナリ慶應元年卒ス年六十九

○下河邊長流

大和宇田ノ人ナリ國學ヲ善クス貞享三年卒ス年六十三

○僧 契 仲

攝州尼ヶ崎ノ人古今和漢ノ書ニ通ズ元祿十四年ヲ以テ寂ス年六十二

○荷田春滿

伏見稻荷山ノ祠官ナリ國學ヲ善クス元文元年卒ス年六十八

○賀茂真淵

遠州敷智郡加茂社ノ祠官ナリ尤モ國學ニ長ズ明和六年ヲ以テ卒ス年七十三

○本居宣長

伊勢松坂ノ人ナリ國學ニ長シ著書頗ル多シ享和元年卒ス年七十二

○伴 蒿 蹊

近江八幡ノ人國學ニ長シ兼テ詩

ヲ善クス文化三年卒ス年七十四ナリ

○塙 保巳一

武州兒玉郡保木野村ノ人ナリ國學ニ長ズ文政五年卒ス年七十七ナリ

○平田篤胤

舊秋田藩士ナリ國學ニ長シ著書多シ天保十四年卒ス年六十八

○青木昆陽

武州ノ人ナリ蘭學ニ長ズ明和六年卒ス年七十二

○大槻盤水

仙台ノ人ナリ蘭學ニ長ズ文化十年卒ス年七十一

○杉田玄伯

舊小濱藩士醫學ニ長ズ文化十四年卒ス年八十五

○宇田川 玄真

本姓安岡氏伊勢ノ人ナリ蘭學ニ長ズ天保五年卒ス年六十六

○箕作 阮甫

美作ノ人洋學ニ長ズ文久三年卒ス年六十二ナリ

○石川 丈山

三河ノ人ナリ人トナリ驍勇、文武ノ學ニ通達シ國歌及ビ詩文ヲ善クス東方ノ詩宗ト稱ス又書ヲ善クス寛文十二年ヲ以テ卒ス年九十ナリ

明治三十年十月十六日印刷
全 三十一年十月十八日出版
全 卅一年十二月廿五日訂正再版印刷
全 卅二年一月廿五日發行

積善館藏版證

近世
說書
作文
教科書

與書

定價 金貳拾五錢

著者 川原 梶 三郎

發行者 石田 忠 兵衛
大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷

印刷者 森 川 桑 三郎
大阪市東區浪花橋通高麗橋筋角

發賣所 積善館
大阪市東區安土町四丁目

發賣所 積善館支店
福岡縣福岡市博多中島町

發賣所 積善館支店
廣島縣廣島市埴屋町

名ハ信字、思順奥州ノ人ナリ安政六年卒ス

○齊藤拙堂

伊勢ノ人博聞強記ナリ慶應元年卒ス年六十九

○下河邊長流

大和宇田ノ人ナリ國學ヲ善クス貞享三年卒ス年六十三

○僧 契仲

攝州尼ヶ崎ノ人古今和漢ノ書ニ通ズ元祿十四年ヲ以テ寂ス年六十二

○荷田春滿

伏見稻荷山ノ祠官ナリ國學ヲ善クス元文元年卒ス年六十八

○賀茂眞淵

遠州敷智郡加茂社ノ祠官ナリ尤モ國學ニ長ズ明和六年ヲ以テ卒ス年七十三

○本居宣長

伊勢松坂ノ人ナリ國學ニ長ジ著書頗ル多シ享和元年卒ス年七十二

○伴 蒿 蹊

近江八幡ノ人國學ニ長ジ兼テ詩

ヲ善クス文化三年卒ス年七十四ナリ

○塙 保巳一

武州兒玉郡保木野村ノ人ナリ國學ニ長ズ文政五年卒ス年七十七ナリ

○平田篤胤

舊秋田藩士ナリ國學ニ長ジ著書多シ天保十四年卒ス年六十八

○青木昆陽

武州ノ人ナリ蘭學ニ長ズ明和六年卒ス年七十二

○大槻盤水

仙台ノ人ナリ蘭學ニ長ズ文化十年卒ス年七十一

○杉田玄伯

舊小濱藩士醫學ニ長ズ文化十四年卒ス年八十五

○宇田川 玄眞

本姓安岡氏伊勢ノ人ナリ蘭學ニ長ズ天保五年卒ス年六十六

○箕作 阮甫

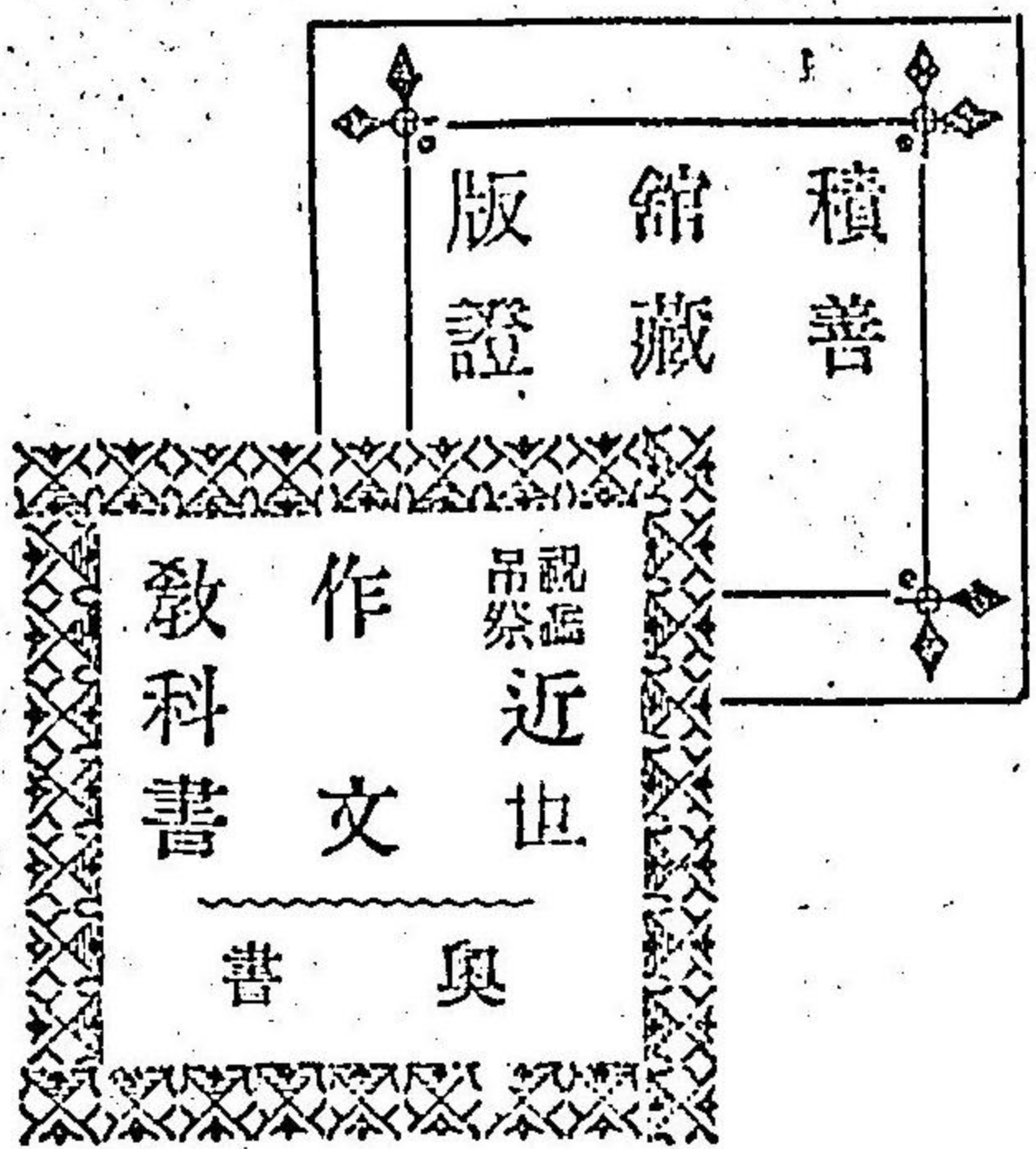
美作ノ人洋學ニ長ズ文久三年卒ス年六十二ナリ

○石川 丈山

三河ノ人ナリ人トナリ驍勇、文武ノ學ニ通達シ國歌及ビ詩文ヲ善クス東方ノ詩宗ト稱ス又書ヲ善クス寛文十二年ヲ以テ卒ス年九十ナリ

鼈頭 大尾

明治三十年十月十六日印刷
全 三十年十月十八日出版
全 卅一年十二月廿五日訂正再版印刷
全 卅二年一月廿五日發行



定價 金貳拾五錢

著 者 川原 梶 三 郎

發 行 者 石 田 忠 兵 衛

印 刷 者 森 川 桑 三 郎

發 賣 所 積 善 館

發 賣 所 積 善 館 支 店

發 賣 所 積 善 館 支 店

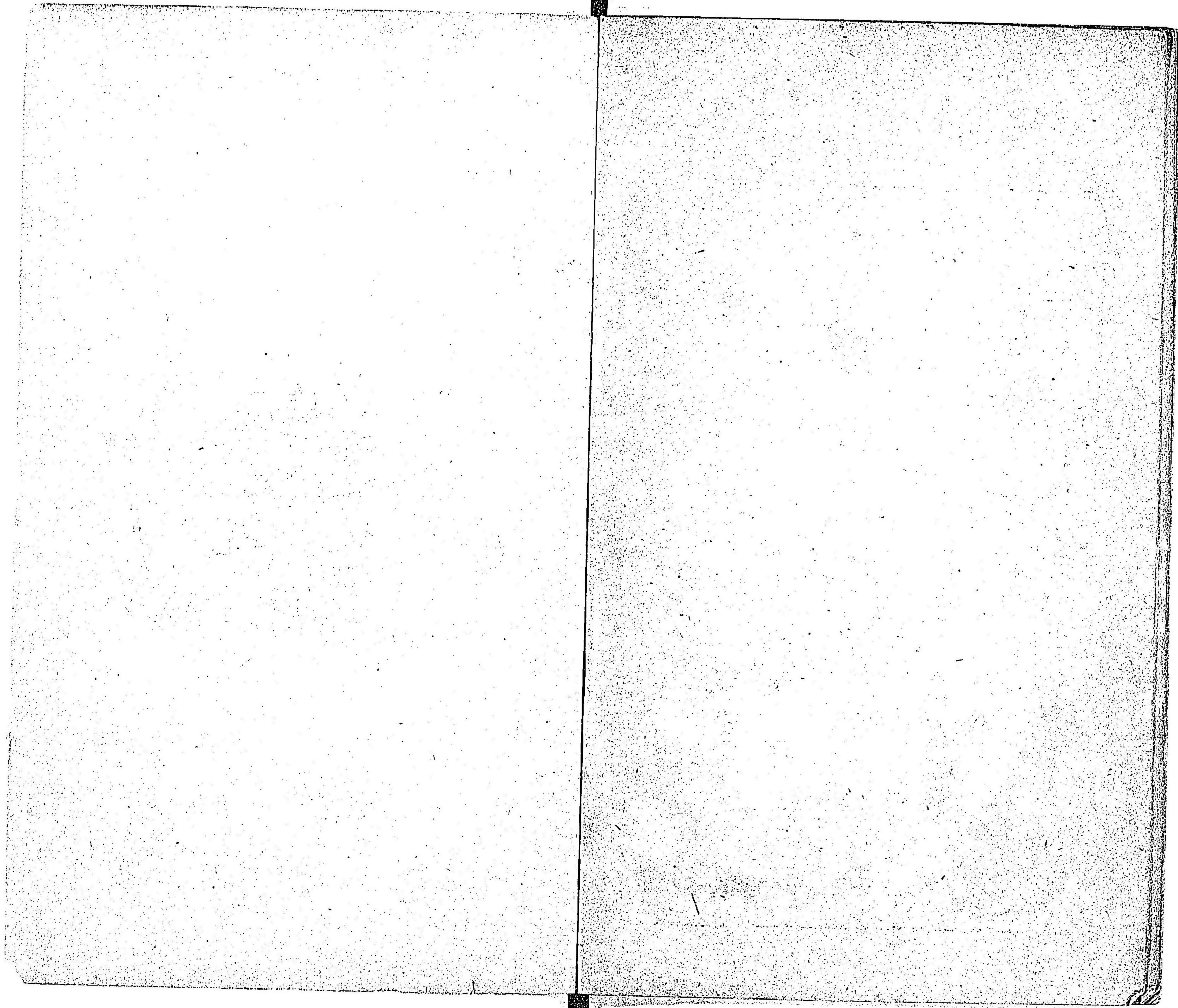
廣島縣廣島市搦屋町

福岡縣福岡市博多中島町

大阪市東區安土町四丁目

大阪市東區浪花橋通高麗橋筋角

大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷





天居民著

近世作文教科書

吊祭

祝詞

大阪積善館發行

079791-000-7

特19-636

祝詞吊祭近世作文教科書

川原 閑舟 / 著

M32.1

DAC-3889

